FC77
31

小學國語讀本

第四學年後期用

東京文理科大學教授
神保格 著

朝讀社 発行

東京文理科大學教授
神保格著

小學國語讀本朗讀法（卷八）

尋四後期用

FC77
31

49.7.31

989206

はしがき

本書編述の趣旨も巻一以下と同じである。

馬淵冷佑氏の有益な助言を得たことも今迄と同じであつて、深い感謝の心を表すことも前と變りはない。

昭和十二年一月

著者

小學國語讀本朗讀法（尋四後期用）目次

はしがき

序說……（一—五）

ショオガク　コクゴドクホン　マキノ　ハチ（本文及び解說）

ダイ　イチ　アオゾラ……九

ダイ　ニ　ツバメワ　ドコエ　イク……一〇

ダイ　サン　ゴホオ……一一

ダイ　シ　ダイレンダヨリ……一二

ダイゴ　アサハダイレン　ニホンバシ……三五
ダイロク　クリカラダニ……三七
ダイシチ　マンジュノヒメ……四〇
ダイハチ　バンシュウ……四二
ダイク　ダイエンシュウ……四五
ダイジュウ　キク……四六
ダイジュウイチ　ヒヨドリゴエ……四七
ダイジュウニ　フリコドケエ……五二
ダイジュウサン　チイサイデンレエシ……五六
ダイジュウヨツキ　ジドオシ……六〇
ダイジュウゴ　フクジュソオ……六三
ダイジュウロク　スキイ……六四
ダイジュウシチ　オオギノマト……七〇
ダイジュウハチ　ユミナガシ……七五
ダイジュウク　モノノネダン……八〇
ニジュウ　ヒロセチュウサ……八二
ニジュウイチ　ホノルルノイチニチ……八四
ニジュウニ　コロンブスノクマゴ……八六
ニジュウサン　ギョソン……八八
ニジュウシ　スイゾウカン……九〇
ニジュウゴ　ソオシュン……九二
ニジュウロク　シミズトンネル……九四

ニジュウシチ　ヨツヤ……九六
ニジュウハチ　ヨコハマ……一〇一
ニジュウク　ヨツバシ……一〇五
サンジュウ　ヨツヤ……一〇八
サンジュウイチ　ヒロセチュウサ……一一二
サンジュウニ　ホノルルノイチニチ……一一四
サンジュウサン　コロンブスノクマゴ……一一六
サンジュウシ　ギョソン……一一八
サンジュウゴ　スイゾウカン……一二〇
サンジュウロク　ソオシュン……一二二
サンジュウシチ　シミズトンネル……一二四

小學國語讀本朗讀法（卷八）

〔尋四後期用〕

序說

本書の記述說明の體裁は前卷と同じである。

〔甲〕といふのは、すべての語句が文章の前後の關係によらず常に同樣なるものをいふ。卽ち現代東京語における慣習を事實のまゝ記述するものである。

(イ) 發音　發音とは母音・子音及びその連結のことである。但し原讀本の漢字及び假名で書いてあるものが如何なる發音を表すか、通俗的にいへば、原文の文字を何と「讀む」かといふこと、及び各語句において文字に關係無く如何なる發音が現代東京語の慣用として用ひられてゐるかといふこと、此の二つは本來別のことである。前者については文部省の「編纂趣意書」に示されたものに據り、其の他一層細かい點について現代東京語における日常の音聲言語慣習を示した。後者については、現代東京語で氣を附けて發音するあらたまつた物の言ひ方の場合を標準として表記した。その表記法は片假名を發音符號と

して使ふ。その他左の如き特殊な符號を使ふ。

ガギグゲゴ　所謂鼻にかゝつた子音(ng)を含むことを示す。

ジズ　從來の歴史的假名遣のジヂは上記標準發音において同じ音聲を表す。

ズヅも同樣區別が無い。本書では之をジズで表す。

つ　促音の符號。例ミっッ「三つ」

シス等左側の小三角(△)はその音節の母音が無聲化することを示す。

母音無聲化について左の如き事實がある。

一　母音無聲化は二つの無聲子音の間に在る時起るのであるが、特にイ、ウの母音に多い。その他の母音も、例へばココ「此處」、カカル「掛」等の語を速く發音する時無聲化を起すことがあるが、本書の標準とするゆつくりあらたまつた發音の場合には無聲化しない。イ、ウの場合も例へばススム「進」、スサマジイ「凄」、ニジュウシサイ「二十四歳」等同樣の子音の間にある時は有聲にいふ方がはつきりして良い。

二　ウツクシサ(卷八、十一頁)

サシツカエ(百八頁)

ウズメツクシテ(九十頁)等

速い發音で二つ又は以上の音節が續いて母音無聲化を起すことがあるが、ゆつくり發音する時その中の一つ(上記▲印)は無聲化しないのが常である。

三　「……シマイマス」「……デス」「マモナク」「シカシ」の樣に、文の終又は聲の切れ目の所で母音無聲化を起すことが屢〻ある。特に語尾をはつきり言はうとする時無聲化しない。本書では是を一々表記しない。

四　オチテ　イク　コロ(卷八、六十八頁)等二つの單語を續けていふ時、第一の語の終と第二の語の首とに無聲子音がある場合、第一語の終の「ク」「ス」「ツ」「フ」「シ」「チ」に母音無聲化を起すことが多いが、此の二つの單語の間を切つて發音する時無聲化しない。本書ではかゝる例も一々表記しない。

(ロ)　**アクセント**　については本書前の諸卷の序說に詳しく述べた。

〔乙〕は一つ一つの特殊の文章により變る事柄をいふ。詳しいことは前卷に述べたことを參照されたい。本書では、乙に屬する斷續・速度・抑揚調子を別にせず、混じて述べた。

(イ)　**斷續**

聲を切る符號

一　間を置く符號

『|』　休止の符號

＞　人の言葉の終に限つて使ふ。聲を切る符號

「切る」といひ、「間」といひ、「休止」といつてもはつきりした區別があるわけでない。それぞれ各文の意義內容により、休む時間の長短に色々の程度があるわけである。かゝる微細な程度は文字や符號で示すことが出來ない。

(ロ)速度　速度も文字や符號で表すことが出來ない。同じ文章でも聽き手の多少や室の廣さによつて速度を加減しなければならない。本書では「何秒」かゝる等の絕對時間の標準を揭げない。

(ハ)抑揚調子　特に注意すべき語句だけについて本書に述べて置いたが、これも實際の發音を聽かなければ詳しいことはわかる筈がない。たゞ一般に亘つて注意すべきは、多くの小學校兒童の朗讀に

まじつて　居ます。

去つて　行きます。

行くのでせうか。

等〇〇を附けた部分を强め過ぎる癖が屢見られる。これは自然の言葉で强めないのが常である。特に必要のない限り强め過ぎない樣注意することが肝要である。

ショオガク　コクゴドクホン　マキノ　ハチ

ジンジョオカヨオ　モンブジョオ

一頁

ダイ　イチ　アオゾラ

二頁

アオゾラワ　ドコマデモ　タカイヨ　ホソナガイ　エントツヤ
アンテナガ　セノビ　シテ　イル
アオゾラワ　ドコマデモ　ツヅクヨ
ノオ　スギテ　ヤマ　コエテ　タダ　ヒトスジ　ミチガ
シロイ

三頁

アオゾラワ　ドコマデモ　ヒロイヨ
ヨセル　ナミ　カエス　ナミ　ナミ　マタ　ナミ　オキガ
トオイ

〔甲〕(イ) 發音『背のび』日常自然の言語ではセノビといふのが常であるが、

此處は韻文の音節數からいつてセノビといふ。

(ロ) アクセント　ドコマデモ、又はドコマデモといふ型もあるが、後者は「飽くまでも」といふ樣な心持を伴ふことが多い。アンテナ、我が國でラヂオ用の語として使ふ此の語は平板式でいふことが多い。原語、ラテン語及び英語 antenna (複數 antennae) は te が强弱アクセントの强音節である。

各節の間に休止を置くこと、その他の切り方は本文表記が一例である。抑揚調子は大して甚だしい變化を附けるべき處は無い。全體を稍ゆつくり、はつきりと朗かにいふのが內容の表現に適當であらう。

〔乙〕

ダイ　ニ　ツバメワ　ドコエ　イク

ナツノ　スエゴロ　ツバメガ　デンセンヤ　モノホシザオニ

ゴロっバグライ　ナランデ　トマっテ　イルノオ　ヨク

四頁

ミカケマス　トキニワ　ジっバ　ニジっバモ　ズラリト

ナランデ　イル　コトガ　アリマス　ソノ　ナカニワ

オヤツバメモ　イマスガ　コトシ　ンマレタ　コツバメガ

タクサン　マジっテ　イマス　モオ　オオキサダケワ

オヤツバメト　オナジデスガ　マダ　クチバシノ　シタノ

アカイロガ　オヤツバメホド　コク　アリマセン　クチバシノ

リョオワキガ　イクブン　キイロニ　ミエルノ　サエ

アリマス

五頁

コオシテ　オオゼエノ　ツバメガ　ナランデ　イルノオ

ミルト　ナニカシラ　カレラワ　ソオダンデモ　シテ　イル

ヨオニ　ミエマス　マモナク　サっテ　イカネバ　ナラヌ

ニっぽンニ　ナゴリオ　オシンデ　イルノカモ　シレマセン‖
コレカラ　イカネバ　ナラヌ　トオイ　クニノ　コトオ
ハナシアっテ　イルノカモ　シレマセン‖
ヤガテ　クガツモ　ナカバオ　スギルト　ツバメワ　ソロソロ
ニっぽンオ　サっテ　イキマス‖　ジュウガツニワ　ゾクゾクト
サっテ　イキマス‖　ジュウイチガツノ　ハジメニ　ナレバ
モオ　ホトンド　ソノ　スガタオ　ミセナク　ナっテ
シマイマス‖
イっタイ　ドコエ　イクノデショオカ‖
ツバメノ　イクサキワ　トオイ　トオイ　ミナミノ　ウミノ
カナタデス‖　トオキョオカラ　ヨンセンキロメエトルモ　アル

六頁

フィリピンデ　アル　トシノ　ジュウガツノ　スエ　コドモガ
ツバメオ　ツカマエマシタ‖　スルト　ソノ　ミギアシニ
ニっぽンノ　モンジオ　シルシタ　チイサイ　キンゾクノ
イタガ　ツイテ　イマシタ‖　ソレニ　ヨルト　サイタマケンノ
アル　トコロデ　ココロミニ　シルシオ　ツケテ　ハナシタ
モノダト　ユウ　コトガ　ワカリマシタ
シカシ　ツバメワ　モっト　モっト　ミナミエ　トンデ
イグノデス‖　ナンヨオノ　シマジマカラ　ナカニワ　サラニ
ウミオ　コエテ　トオイ　オオストラリヤマデ　イクノガ
アルト　ユウ　コトデス‖
ツバメワ　トリノ　ナカデモ　イチバン　ハヤク　トブ

七頁

八頁

トリデス　キシヤヤ　ジドオシヤモ　カナワヌ　クライノ
ハヤサデスカラ　イクヒャクキロメエトルノ　ウミオ
イつキニ　トブ　コトモ　ケつシテ　フジギデワ　アリマセン
シカシ　カレラノ　ナカニワ　コトシ　ンマレタ　コツバメガ
タクサン　イマス　マタ　トキニ　フイノ　アラシヤ　ソノタ
オモイガケヌ　サイナンニ　アワヌトモ　カギリマセン
ショオワ　ロクネンノ　アキデシタ　ヨオロっパノ　アル
クニデ　ヤク　ジュウマンバノ　ツバメガ　キュウニ　オチテ
キマシタ　ソノトシワ　キコオガ　フジュンデ　クガツノ
ナカゴロ　キュウニ　サムク　ナリ　アメガ
フリツズキマシタ　オリカラ　ミナミエ　ヒコオチュウダっタ

九頁

ツバメワ　ショクニ　ウエ　ツメタイ　アメニ　ズブヌレニ
ナっテ　モオ　ミウゴキモ　デキナタ　ナっテ
シマっタノデス　ソコデ　ソノ　クニノ　ヒトビトワ　コノ
ツカレハテタ　トリオ　ヒロイアツメテ　アタタカイ　イエニ
イレテ　ヤリ　ショクモツオ　アタエテ　ヤリマシタ
ソオシテ　ツカレノ　ナオルノオ　マっテ　ミナミノ
アタタカイ　クニエ　オクっテ　ヤリマシタ　ナニシロ
ジュウマント　ユウ　カズデスカラ　コレオ　オクルノモ
ヨオイデワ　アリマセン　クガツノ　スエカラ　ジュウガツノ
ハジメニ　カケテ　キシヤヤ　ヒコオキデ　ナンカイニモ
オクっタト　ユウ　コトデス

十頁

ムカシカラ　ツバメワ　オナジ　イエニ　カエっテ　クルト
イワレテ　イマス　ツマリ　コトシ　アル　イエノ
ノキシタデ　スオ　ツクっタ　ツバメガ　ライネン　マタ
オナジ　スエ　モドっテ　クルト　ユウノデス　キンネンニ
ナっテ　イロイロノ　ホオホオデ　コノ　コトオ　シラベテ
ミマスト　ヤハリ　ソオデ　アル　コトガ　ワカリマシタ
タダ　アノ　チイサイ　カラダデ　リョコオオ　ツズケル
セエカ　トチュウデ　シンデ　カエっテ　コナイ　ツバメモ
カナリ　オオイト　ユウ　コトデス

十一頁

ニっポンカラ　オオストラリヤマデワ　イチマンキロメエトル
イジョオモ　アリマスガ　ツバメワ　ケっシテ　ジブンノ

クニオ　ワスレマセン　ニっポンニ　ハルガ　クルト
オモエバ　モオ　カレラワ　ヤモ　タテモ　タマラズ　キタオ
サシテ　ススムノデス　ソノ　チイサイ　ムネニハ　ワカバノ
モエル　ニっポンノ　ハルノ　ウツクシサオ　オモイウカベテ
イルデショオ　アオアオト　ウエツケラレタ　ナツノ
イナダオ　オモイウカベテ　イルデショオ　ナニヨリモ　アノ
イエノ　ノキシタニ　ツクっタ　フルスガ
ナツカシイノデショオ

十二頁

ハルニ　ナルト　ダレモガ　コノ　メズラシイ　オキャクノ
カエっテ　クルノオ　マチコガレテ　イマス　チラリト
ツバメノ　スガタオ　ミタ　ヒトワ　キっト

キョオ　ハジメテ　ツバメオ　ミタヨ>ト　イッテ
ヨロコビマス』　ワケテモ　ジブンノ　イエエ　イソイソト
カエッテ　キタ　ツバメオ　ムカエル　ヒトノ　ココロワ
ドンナニ　ウレシイ　コトデショオ』

〔甲〕

(イ) **發音**　ンマレタのンはm音だけで一音節をなすのが通常の發音である。フィリピン、フィの音は一音節にいふ。フ、イと二音節（原書七頁末行『不意』參考）に云つてはよくない。フィの子音は日本語では兩唇無聲摩擦音(F)を使ふ。原語 Philippine の ph は齒唇無聲摩擦音(f)である。ススム（原書十一頁四行）始めのスに母音無聲化を起し易いが、有聲にいふ方がはつきりして良い。ウックシサ、速くいふ時ウックシサと三つの音節が續いて母音無聲化を起すことがある。クだけは有聲にいはないと言葉がはつきりしないであらう。

(ロ) **アクセント**　ミエルノ　サエ、多くは續けていひ、サエのサは高くなら

ない。此處はサエの意味を幾分强める心でサエの型を表記した。サつテ、時にサっテの型でいふ人もある。ナゴリオ、又はナゴリオともいふ。『十一月』は「の」の附かない形ではジュウイチガツワ等の型である。

イクノデショオカ、『でせう』を强めるときはデショオの型でいふ。此處は强めない。フィリピン、此の語をフィリっピンの樣に「促音」を入れていふ時はリを高くいふのが日本語の慣用となつてゐる。促音の無い形は日本語で餘り使はれない。從つて本文のアクセントは原語のアクセントに倣つて第一音節を高くした。ユウコトガ（原書六頁八行）、又は續けてユウコトガ。原書七頁三行のもユウコトデスともいふ。ハヤサ、又はハヤサ(平)ともいふ。從つてハヤサデスカラとなる。トブ　コトモ、又は續けてトブコトモ。ソメタ、又は平板式にもいふ。ショオワ　ロクネン、六年等年數を續けていふ時、平板式にひ、續けてはショオワロクネンの型となる。一つ離していふ時はショ

オワである。オ|チテ、比較オチ|ル、オチ|ナイ等。ナカ|ゴロ、又はナカ|ゴロともいふ。ツカレハテタ、又はツカレハテタともいふ。『十月』「の」の附かない形はジュウガツワ等の型である。ナンカイニモ、又はナンカイニモともいふ。ス、『集』常に平板式である。參考、ス|エ、ス|ガ等は「酢」の意である。コノ コト|オ、又は續けてコノ|コト|オ。イ|ソイソト、又は平板式にもいふ。

〔乙〕

此の課はすべて談話の口調で、餘り速くなく、聽いてゐて意味や事柄のはつきりわかる樣にいふべきである。

『ほとんど』原書五頁七行)を稍强める。同頁末行『どこへ』を强める。『行くのでせうか』の終は尻下りの調子。六頁末行『もつともつと』を强める。七頁二行『オーストラリヤ』を强める。同頁末行『時に』の次で一寸切るのがよい。九頁一行『身動きも』を稍强める。九頁七行『容易では』八・九行『何回にも』を稍强める。十頁五行『やはり』を强める。十頁七・八行『死んで』の次で一寸切るのがよい。續け過ぎると『死んで歸る』

十三頁

といふ樣な意味に聞える恐がある。十一頁『矢もたてもたまらず』を强める。十二頁四行『今日』『始めて』共に同じ位强める。或は寧ろ『今日』の方を强めてよい。その時は「前から何時つばめを見るか」と待つてゐた心を表す。『始めて』を强める時は「何日」といふ事よりも「始めて見た」喜びの方が强く表れる。『見たよ』の終は尻上りの調子にいふ。

ダイ サン ゴホオ

タイワンノ バンジンニワ モト ヒトノ クビオ トッテ
オマツリニ ソナエル ウウガ アッタ アリサンバンノ
ヤクニンニ ナッタ バカリノ ゴホオワ ナントカ シテ
ジブンノ オサメル ブラク ダケデモ コノ ワルイ
フウシュウオ ヤメサセヨオト オモッテ イロイロ

十四頁

クシンオ シタ ヒトオ コロスノワ ヨク ナイ コトデ
アル

コオ イッテ ゴホオワ シバシバ バンジンニ
トキキカセタ シカシ オマツリガ チカズクト バンジンワ
ゼヒ クビオ ソナエナケレバ ナラナイト モオシデタ

ゴホオワ
キョネン トッタ クビガ アル ハズダ イッタイ イクツ
アルノカ シジュウアマリ アリマス

ソレデワ ソノ クビオ タイセツニ シテ オイテ
コレカラ マイネン ヒトツズツ ソナエル コトニ スルガ
ヨイ バンジンワ サトサレテ シブシブ ヒキサガッタ

十五頁

ゴホオワ ガンライ ナサケブカイ ヒトデ バンジンオ
ヒジョオニ カワイガッタカラ バンジンモ シダイニ
ナツイテ ノチニワ ゴホオオ オヤノ ゴトク シタウ

ヨオニ ナッタ コオシテ アリサンバン ダケワ シバラク
クビトリノ コトモ ヤンデ ヘエワガ ツヅイタガ ホカノ
ブラクデワ マイネン マツリガ アル タビニ クビオ

トッテ ソナエテ イタ ソレオ ミルニ ツケ キクニ
ツケ アリサンノ バンジンワ ココロオ ウゴカサレタ

シジュウヨネンワ イツノマニカ スギテ モオ ソナエル
クビガ ヒトツモ ナクナッタ コトシコソ アタラシイ
クビオ ソナエナケレバ ナラナイト ユウノデ バンジンワ

十六頁

ソノ　コトオ　ゴホオニ　モオシデタ　ゴホオワ　モオ
イチネン　マっテ　クレ　ヒトオ　コロスノワ　ヨク
ナイ＞ト　ナダメタ　ヨクネンモ　ヨクヨクネンモ　オナジ
コトガ　クリカエサレタ　バンジンワ　ソロソロ　ゴホオノ
ココロオ　ウタガウ　ヨオニ　ナっタ　ソオシテ
ヨネンメニワ　モオ　ドオシテモ　ゴホオノ　ユウ　コトオ
キコオト　シナカっタ
ソレホド　クビガ　ホシイナラ　アスノ　ヒルゴロ　アカイ
ボオシオ　カブっテ　アカイ　キモノオ　キテ　ココオ
トオル　モノノ　クビオ　トレ＞ト　ゴホオワ　コタエタ
ヨクジツ　バンジンドモガ　ヤクショノ　チカクニ

十七頁

アツマっテ　イルト　ハタシテ　アカイ　ボオシオ　カブリ
アカイ　キモノオ　キタ　ヒトガ　キタ　マチカマエテ　イタ
カレラワ　タチマチ　ソノ　ヒトオ　コロシテ　クビオ
トっテ　シマっタ
イガイニモ　ソレワ　ゴホオノ　クビデ　アっタ　オヤノ
ヨオニ　シタっテ　イル　ゴホオノ　クビデ　アっタ
バンジンドモワ　コエオ　アゲテ　ナイタ
カレラワ　ゴホオオ　カミニ　マッっタ　ソオシテ　ソレ
イライ　アリサンバンニワ　クビトリノ　アクシュウガ
フっツリト　ナクナっタ

〔甲〕(イ)發音『心』ココロの始めの「コ」に母音無聲化を起し易いが、有聲にいふ

十八頁

方がよい。十六頁六行『疑ふ』はウタゴオといはない。口語だからである。マツタ「ッ」に母音無聲化を起し易い。やはり有聲にいふ方がよい。

(ロ) **アクセント** ヒトノ「人間」一般の意の時は平板式にいふことが多い。ソナエル、又はソナエルといふ人もある。ソナエナケレバ、又はソナエナケレバ。シテ　オイテ、又は續けてシテオイテ。シタウ、又はシタウともいふ。

オナジ　コトガ、又は續けてオナジコトガ。クリカエサレタ、又は平板式にもいふ。ユウ　コトオ、又は續けてユウコトオ。マチカマエテ　イタ、又は續けてマチカマエテイタ。シタウ、シタツテ、又はシタウ、シタツテともいふ。マツツタ、ッに母音無聲化を起す時はアクセントがマツツタとなる。

〔乙〕

『部落だけ』こゝは『だけ』の意味が稍強いので、アクセントも「タケデモ」の型でいふ。十三頁八行『ぜひ』を強める。『幾つあるのか』の終は尻下り

の調子。『親の如く』を稍強める。十五頁八行『今年こそ』を強める。『もう一年』を強める。『それ程首がほしいなら』云々、吳鳳が死を決していふ言葉はゆつくり、沈痛に、聲の切れ目を稍長くいふのが良い。『赤い着物を着て』の次は切らない方がよい。もし切ると「赤い着物を着て首を取る」といふ様な意味に聞える恐がある。『忽ち』を強める。『意外にも』へ移る前は休止を餘り長く置かない方がよい。首を取つて間もなく氣が附いた心を表す。『吳鳳の首』の『吳鳳』を二回とも同じ様に強める。『親のやうにしたつて居る』は強めない方がよい。況や『首』を強めては甚だよくない。『聲を上げて』を強める。『泣いた』の次は稍長い休止を置く。悲み悔んで十分考へる心を表す。

ダイシ　ダイレンダヨリ

ミナサン　オジョオブデ　ナニヨリデス　ツクエノ　ウエニ

ミナサンカラノ　オテガミガ　ノッテ　イルト　ワタクシワ
ウレシクテ　ナリマセン　オモテノ　ジオ　ミタ　ダケデ
ダレサンカラノダト　ユウ　コトガ　スグ　ワカリマス
ミナサンノ　ヤマアソビノ　コトヤ　ウンドオカイノ
ヨオスナドガ　メニ　ミエル　ヨオデス

二十頁

コノマエ　ダイレンノ　マチノ　ナニ　ニチロセンソオノ
ショオグンガタノ　ナオ　トッテ　オオヤマドオリトカ
ノギマチ　トオゴオマチトカ　ユウノガ　アル　コトオ
オシラセ　シマシタ　ソレカラ　オオキナ　フトオガ　アッテ
イチネンカンニ　キセンガ　ナンゼンソオモ　シュツニュウシ
ヒャクマンチカイ　ヒトタチガ　ノリオリ　スル　コトモ

カキマシタ　マチノ　タテモノワ　セエヨオフウデ　ナミキノ
ウツクシイ　アリサマワ　オオクリ　シタ　エハガキデ

二十一頁

ワカッタ　コトト　オモイマス

マンシュウコクガ　デキテカラワ　ココガ　オモテゲンカンニ
ナッテ　コオツウジョオ　イッソオ　ジュウヨオナ　トコロニ
ナリマシタ　トクベツ　キュウコオレッシャ　アジアガ
スバラシイ　ハヤサデ　ハシッテ　シンキョオエワ
ハチジカンアマリ　ハルビンエワ　ジュウサンジカンアマリデ
イケマス　ソレニ　ニッポンナイチエ　オオフクスル　フネガ
マイニチノ　ヨオニ　デテ　ミッカメニワ　モジニ　ツキマス
マタ　リョカクヒコオキデ　アサ　タテバ　ユウガタニワ

二十二頁

オオサカエ　ソレカラ　キシャデ　ヨクチョオニワ　モオ
トオキョオノ　ツチガ　フメルノデス‖
ハジメ　ロシヤジンガ　ココオ　ヒライタ　トキ　ダルニイト
ヨンデ　イマシタ‖　コレワ　トオイ　トコロト　ユウ　イミデ
ダイレンノ　ナモ　コノ　ダルニイカラ　オコっタノデスガ
ニっポンノ　ナイチカラ　イエバ　トオイ　トコロデモ
ナンデモ　アリマセン‖　ロシヤジダイデ　オモイダシマシタガ
ソノコロ　ツクラレタ　オオキナ　エントツガ　フトオノ
チカクニ　ソビエテ　イマス‖　イチジワ　トオヨオイチト
マデ　イワレタ　エントツデス‖　セっケエハ　シタ　モノノ
アマリ　オオキクテ　ロシヤジンモ　ツクリカネテ

二十三頁

二十四頁

イマシタノオ　トオジ　ココニ　キテイタ　ニっポンノ
ワカイ　ギシガ　ヒキウケ　ミゴトニ　ツクリアゲテ　ミナオ
アっト　オドロカシタト　ユウ　コトデス‖
ソノコロ　ニっポンジンワ　カゾエル　ホドシカ　スンデ
イナカっタノデスガ　イマデワ　ジュウナンマンニンニモ
ナリ　マンシュウジンノ　アイダニモ　ニっポンゴガ
ダンダン　ヒロマっテ　イキマス‖　キノオモ　イチバオ　ミニ
イコオト　シテ　ミチガ　ワカラナカっタノデ　アソンデ
イタ　マンシュウジンノ　コドモニ　タズネマスト
ニっポンゴデ　ハっキリト　オシエテ　クレマシタ‖
ダイレンニワ　ホシウラト　ユウ　カイガンコオエンガ

二十五頁

アリマス　マンシュウワ　カワモ　ミズウミモ　スクナイノデ
オクチニ　スンデ　イル　ヒトタチワ　ウミガ　メズラシク
ナツワ　ココエ　ドット　オシヨセテ　サカンニ
カイスイヨクオ　シマス　セエヨオジンモ　オオゼエ　キテ
イロ　トリドリノ　テントヤ　カイスイギデ　カイガンワ
ハナガ　サイタ　ヨオデス
マンシュウワ　アメガ　スクナク　ワタクシガ　ココニ
キテカラ　ニカゲツニ　ナリマスガ　ソノ　アイダ　ホトンド
アメラシイ　アメワ　フリマセン　フッテモ　スグ　カラリト
ハレアガッテ　シマイマス　バサバサ　シタ　アカッポイ
ツチデスガ　コオリヨオト　ダイズワ　ユタカニ　ミノリマス

二十六頁

コノアイダ　エンソクデ　リヨジュンエ　イキマシタ
ソオシテ　ハクギヨクザンノ　ヒヨオチュウトオオ
アオイダリ　ニヒヤクサンコオチニ　ノボツタリ　シテ
ニチロセンソオトオジノ　イサマシイ　ハナシオ　キキマシタ
ソノ　ハナシワ　マタ　ツギノ　トキ　オシラセ　シマショオ
デワ　ミナサン　ゲンキデ　イテ　クダサイ　サヨオナラ
ネン　ガつピ　キムラ　ショオイチ　ヨネンセエノ
ミナサマエ

二十七頁

〔甲〕(イ) 發音『百萬近い』(二十頁六行)の「近」はチカイでもジカイでもよい。
(ロ) アクセント　ダレサンカラノダ、『カラノダ』を別にいふ時はカラノダといふ型でいふ。ユウコトガ、又は續けてユウコトガ。ハヤサ、又

二十八頁

はハヤサ。ハシつテ、シに母音無聲化を起す時はハ△シつテの型でいふ。ハルビンが原語に近いアクセントであらう。今は平板式とし「……エワ」が附いてハルビンエワの型を表記した。

マイニチノ　ヨオオニ、續けてマイニチノヨオオニとなる。ダルニイ、原語のアクセントに近くいへばダルニイである。イミ、又はイミともいふ。トオヨオイチ、又はトオヨオイチともいふ。アつト、アク、セント不定。ユウ　コトデス、又は續けてユウコトデス。アソンデ　イタ、又は續けてアソンデイタ。『奥地』アクセント不確、平板式又はオク△チであらう。ダイズ、又はダイズ。

〔乙〕

此の課は手紙であるが、手紙を音讀して他人に聽かせる時、意味のよくわかる樣にいふことを目標とするのがよい。『目に見えるやうです』の『やうです』を强め過ぎない樣注意。(二十六頁)二行『花が咲いたやうです』も同じである。その他意味の上から大切な語句を强めること、全體をやゝゆつくりいふこと、休止を適當に附けることだけで意味を明かに表すことが出來る筈である。

二十九頁

ダイ　ゴ　アサノ　ダイレン　ニホンバシ

ハシノ　トケエワ　ハチジニ　チカイ　ソノ　シタニ　オイタ△△

ロシヤジンガ　バンバコオ　ムネニ　サゲテ　タつテ　イル

シキイシオ　ミツメタ　ママ　ウゴコボトモ　シナイ

シュっキンオ　イソグ　ヒトタチガ　トオル　イキオイヨク△△

三十頁

ステっキオ　フリフリ　クツオトオ　タテテ△

スレチガイニ　ジドオシャガ　クル　コゾオサンノ

ジテンシャガ　アトニ　ツズク　デンシャガ　ゴオゴオト

ハシっテ　クル

三十一頁

ハシノ　シタオ　カネオ　ナラシテ　カモツレっシャガ　イク〕
セキタンオ　ヤマホド　ツンデ　シロイ　ケムリオ　ハシノ
ウエニ　フキチラシナガラ〔ナガラ〕フトオノ　ホオワ　ケムリヤ
モヤデ　ハイイロニ　カスンデ　イル〕

三十二頁

ロシヤマチ　ハトバノ　ウミガ　アカレンガノ　タテモノノ
スキカラ　ミエテ　ジャンクガ　シズカニ　ウカンデ　イル〕

〔甲〕

(イ) **發音**　特に記すべきことなし。

(ロ) **アクセント**　フリフリ、又はフリフリといつてもよい。クツオトオ、又はクツオトオといふ人もある。ハシつテ、前課の記事(本書三十四頁參照。フキチラシナガラ、『ナガラ』の附く形は前の動詞が平板式の時は全體が平板式である。フキチラスは平板式である。前の動詞が起伏式(例、タベル、ウゴク、タオレル)の時は例へばタベナガラ、ウゴキナ

ガラ、タオレナガラの型でいふ。此の型に倣つてフキチラシナガラといふのは原則に反する。

〔乙〕

此の課は原讀本の如く文字に書いたのを視ると所謂「韻文」の形をなしてゐるが、發音の言葉としては何等韻文らしい所はない。通常の日常談話と同じ調子でいつて差支ない。抑揚調子等大して變化を附けるべき處はない。

ダイ　ロク〕　クリカラダニ〕

キソ　ヨシナカ　ミヤコエ　セメノボルト　キキテ　ヘエケワ
アワテテ　ウっテオ　サシムケタリ〕
タイショオ　タイラノ　コレモリワ　ジュウマンキオ
ヒキツレ　エっチュウノ　クニ　トナミヤマニ　ジンオ　トル〕

三十三頁

ヨシナカワ　ゴマンキオ　△ヒキツレ　コレモ　オナジク
トナミヤマノ　フモトニ　ジンオ　トル　リョオグン
タガイニ　オシヨセテ　ソノ　アイダ　ワズカニ
サンチョオバカリト　ナレリ
ヨニ　イリテ　ヨシナカ　△ヒソカニ　ミカタノ　ヘエオ
テキノ　ウシロニ　マワラセ　ゼンゴヨリ　ドット
トキノコエオ　アゲサセタリ
フイオ　ウタレテ　ヘエケノ　グンワ　ウエオ　△シタエノ

三十四頁

オオサワギ　ユミオ　トル　モノワ　ヤオ　トラズ　ヤオ
トル　モノワ　ユミオ　トラズ　△ヒトノ　ンマニワ　オノレ
ノリ　オノレノ　ンマニワ　△ヒトガ　ノリ　ウシロムキニ

三十五頁

ノルモ　アレバ　イっピキノ　ンマニ　△フタリ　ノルモ　アリ
クラサワ　クラシ　ミチワ　ナシ　ヘエケノ　グンワ
ニゲバオ　ウシナイテ　ウシロノ　クリカラダニエ　ナダレオ
ウっテ　オチイリタリ
オヤモ　オツレバ　ソノ　コモ　オチ　オトオトモ　オツレバ
アニモ　オテ　ンマノ　ウエニワ　△ヒト　△ヒトノ　ウエニワ
ンマ　カサナリ　カサナっテ　サシモニ　△フカキ
クリカラダニモ　ヘエケノ　ジンバニテ　ウズマレリ
タイショオ　コレモリワ　イノチ　カラガラ　カガノ　クニエ
ニゲノビタリ

〔甲〕

(イ) 發音『十萬騎』『五萬騎』の「騎」はキ又はギどちらでもよい。

(ロ) アクセント　フモトニ、又フモトニといふ人もある。リョオダン、又は平板式にもいふ。ウシナイテ、又はウシナイテといつてもよい。

文語體はこれが始めてであるが、此の種の文語體は大體口語の調子で讀んでよい。『不意を討たれて』から後の混亂の有樣は休止を極めて短くすることによつて表すことが出來る。速度は必ずしも速くしないでよい。『なだれを打つて』を强めるとよい。

〔乙〕

ダイ　シチ　マンジュノヒメ

ミナモトノ　ヨリトモガ　ツルガオカノ　ハチマングウエ
マイオ　ホオノオスル　コトニ　ナッテ　マイヒメオ
アツメマシタ　ジュウニニンノ　ウチ　ジュウイチニンマデワ
アリマシタガ　アトノ　ヒトリガ　アリマセン　コマッテ

イル　トコロエ　ゴテンニ　ツカエテ　イル　マンジュガ
ヨカロオト　モオシデタ　モノガ　アリマシタ　ヨリトモワ
ヒトメ　ミタ　ウエデト　マンジュオ　ヨビダシマシタガ
カオモ　スガタモ　ウツクシク　ジョオヒンニ
ミエマシタノデ　サっソク　マイヒメニ　キメマシタ
マンジュワ　トオネン　ヨオヤク　ジュウサン　マイヒメノ
ナカデワ　イチバン　トシワカデシタ
ホオノオノ　トオジツワ　ヨリトモオ　ハジメ
マイケンブツノ　ヒトビトガ　ナンゼンニントモ　ナク
アツマリマシタ　イチバン　ニバン　サンバント
ジュウニバンノ　マイガ　メデタク　スミマシタガ　ソノ

三十七頁

ナカデ　コトニ　ヒトノ　ホメタテタノワ　ゴバンメノ
マイデシタ　コノトキニワ　ヨリトモモ　オモシロク　ナッテ
イッショニ　マイマシタ　ソノ　ゴバンメノ　マイオ
マッタノガ　カノ　マンジュノヒメデ　アッタノデス

ヨクジツ　ヨリトモワ　マンジュオ　ヨビダシテ　サテサテ
コノタビノ　マイワ　ニッポンイチノ　デキデ　アッタ
オマエノ　クニワ　ドコ　マタ　オヤノ　ナワ　ナント
モオス　ホオビワ　ノゾミニ　マカセテ　トラセルデ
アロオ　イイマシタ　マンジュワ　オソルオソル　ベツニ
ノゾミワ　ゴザイマセンガ　カライトノ　ミガワリニ
タチトオ　ゴザイマス　モオシマシタ　コレオ　キクト

三十八頁

ヨリトモノ　カオイロワ　サット　カワリマシタ　カワルモ
ドオリ　コレニワ　フカイ　ジジョオガ　アッタノデス
ソレヨリ　イチネンバカリ　マエノ　コトデス　キソ
ヨシナカノ　ケライ　テズカノ　タロオ　ミツモリノ
ムスメワ　ヨリトモニ　ツカエテ　オリマシタガ　ヨリトモガ
ヨシナカオ　セメヨオト　スルノオ　サットテ　ヨシナカノ
トコロエ　シラセマシタ　ヨシナカカラワ　スグ　ヘンジガ
アッテ　スキオ　ネラッテ　ヨリトモノ　イノチオ　トレト
キソノ　イエニ　ツタワッテイタ　タイセツナ　カタナオ
オクッテ　ヨコシマシタ　ミツモリノ　ムスメワ　ソノゴ
チュウヤ　ヨリトモオ　ネライマシタガ　スコシモ　スキガ

三十九頁

アリマセン　カエっテ　ハダミ　ハナサズ　モっテ　イタ
カタナオ　ミツケラレテ　シマイマシタ　ソノ　カタナニ
ミオボエガ　アっタ　ヨリトモワ　サア　コノ　オンナニワ
ユダンガ　デキヌト　ユウノデ　イシノ　ロオニ　イレテ
シマイマシタ　カライトト　ユウノワ　コノ　オンナノ
コトデシタ　カライトニワ　ソノトキ　ジュウニニ　ナル
ムスメガ　アリマシタ　ソレガ　マンジュノヒメデ　キソニ
スンデ　オリマシタガ　カゼノ　タヨリニ　コノ　コトオ
キイテ　ウバオ　ツレテ　カマクラオ　サシテ　ノボリマシタ
フタリワ　ノオ　スギ　ヤマオ　コエ　ナレナイ　ミチオ
ヒトツキアマリモ　アルキツズケテ　ヨオヤク　カマクラニ

四十頁

四十一頁

ツキマシタ
マズ　ツルガオカノ　ハチマングウエ　マイっテ　ハハノ
イノチオ　タスケタマエト　イノリ　ソレカラ　ヨリトモノ
ゴテンエ　アガっテ　ウバト・フタリデ　オツカエ　シタイト
ネガイデマシタ　カゲヒナタ　ナク　ハタラク　ウエニ
ヒトノ　シゴトマデ　ヒキウケル　ヨオニ　シタノデ
マンジュ　マンジュト　ヒトビトニ　カワイガラレマシタ
サテ　マンジュワ　ダレカ　ハハノ　ウワサオ　スル
モノワ　ナイカト　キオ　ツケテ　イマシタガ　トオカ
タっテモ　ハツカ　タっテモ　ハハノ　ナオ　ユウ　モノワ
アリマセン　アア　ハハワ　モオ　コノヨノ　ヒトデワ

四十二頁

ナイノカト　チカラオ　オトシテ　イマシタ

アルヒノ　コト　マンジュガ　ゴテンノ　ウラエ　デテ

ナンノ　キモ　ナク　アタリオ　ナガメテ　イマスト

チイサイ　モンガ　アリマシタ　ソコエ　シモズカエノ

オンナガ　キテ　アノ　モンノ　ナカエ　ハイッテワ

ナリマセヌト　モオシマシタ　ワケオ　タズネマスト　アノ

ナカニワ　イシノ　ロオガ　アッテ　カライトサマガ

オシコメラレテ　イマス>ト　コタエマシタ　コレオ　キイタ

マンジュノ　オドロキト　ヨロコビワ　ドンナデ

アッタデショオ

ソレカラ　マモナクノ　コトデス　アルヒ　キョオワ

オハナミト　ユウノデ　ゴテンワ　ヒトズクナデシタ

マンジュワ　ソノヨ　ヒソカニ　ウバオ　ツレテ　イシノ

ロオオ　タズネマシタ　ハチマンサマノ　オヒキアワセカ

モンノ　トワ　ホソメニ　アイテ　オリマシタ　ウバオ

モンノ　ワキニ　タタセテ　オイテ　ヒメワ　ナカニ

ハイリマシタ　ツキノ　ヒカリニ　スカシテ　アチラコチラ

サガシマスト　マツバヤシノ　ナカニ　イシノ　ロオガ

アリマシタ　マンジュガ　カケヨッテ　ロオノ　トビラニ

テオ　カケマスト　ダレカ>ト　ロオノ　ナカカラ

モオシマシタ　マンジュワ　コオシノ　アイダカラ　テオ

イレテ　オナツカシヤ　ハハウエサマ　キソノ　マンジュデ

ゴザイマス＝ナニ　マンジュ＝キソノ　マンジュカ＝オヤコワ
テオ　トリアっテ　ナキマシタ＝ヤガテ　ウバオモ　ヨンデ
サンニンワ　ソノヨオ　ナミダノ　ウチニ　アカシマシタ＝
コレカラ　ノチ　マンジュワ　ウバト　ココロオ　アワセ
オリオリ　ロオヤオ　タズネテワ　ハハオ　ナグサメテ
オリマシタ＝ソオシテ　ソノ　アクルトシノ　ハル
マイヒメニ　デル　コトニ　ナっタノデシタ＝
オヤオ　オモウ　コオシノ　ココロニワ　ヨリトモモ
カンシンシテ　イシノ　ロオカラ　カライトオ　ダシテ
ヤリマシタ＝フタリガ　タガイニ　トリスガっテ
ウレシナキニ　ナイタ　トキニワ　ヨリトモオ　ハジメ

四十六頁

イアワセタ　モノニ　ダレ　ヒトリ　モライナキオ　シナイ
モノワ　アリマセンデシタ＝　ヨリトモワ　カライトオ
ユルシタ　ウエニ　マンジュニワ　タクサンノ　ホオビオ
アタエマシタ＝ソオシテ　オヤコワ　ウバ　モロトモニ
ヨロコビ　イサンデ　キソエ　カエリマシタ＝

〔甲〕(イ) **發音**　特に記すべきことなし。

(ロ) **アクセント**　ホオノオスル　コトニ、又は續けてホオノオスルコトニ。トオジッ、又はトオジッといふ人もある。コノトキニワ、別々にはコノ(平)トキニワ。サつト、アクセント不定。

コノ　コトオ、又は續けてコノコトオ。スル　モノワ、又は續けてスルモノワ。ユウモノワも同様。ナンノ　キモ　ナク、又はナンノ……ともいふ。コオシ(平)『格子』。コオシ『孝子』、アクセントのちがひ注意。

ナイタ　トキニワ、又は續けてナイタトキニワ。

『萬壽が』(三十五―六頁)を強める。『五番目の舞を舞つたのが』を強める。『日本一』を強める。

〔乙〕

萬壽の言葉『別に云々』は低い調子で而も力強く且ゆつくり言ふべきである。『ございませんが』の次で稍長い休止を置くのもよい。『命を取れと』の「と」の前は切らない方がよい。『此の女の』(四十頁四行)を強める。『それが』を稍強める。『此の世の人ではないのかと』の「と」の前も切つてはいけない。『どんなで』を十分強めるのがよい。『誰か』といふ母の言葉は怖れと警戒等の心をこめて語氣鋭くいふ。『おなつかしや母上様』の次は殆ど切らぬ位にいふ。『何萬壽』の次は十分に休止を置く。『木曾の萬壽か』の次も長い休止を置いてよい。あとは物も言ひ得ず「手を取合つた」だけの心を表す。『誰一人』を強めるとよい。

四十七頁

ダイ　ハチ　バンシュウ

アサワ　シモダ　ヤネモ　カキネモ　コミチモ　コミチニ

オチチっタ　キノハモ　マっシロデ　アル

ソラワ　マっサオニ　スンデ　アサヒガ　ヤガテ　ノラ

イチメンオ　アカルク　スル

ケタタマシク　モズガ　ナク

タンボワ　モオ　ナカバイジョオ　カリトラレテ　オクテ

四十八頁

ダケガ　ココカシコニ　ノコっテ　イル　ソオシテ　シモノ

キエル　コロカラ　クミアイノ　ダっコクキノ　オトガ

アタリノ　シズカサオ　ヤブっテ　ケエキ　ヨク　キコエテ

四十九頁

クル

ムラデ　コレホド　ツウカイナ　シゴトガ　アロオカ

タガヤシテ　ウエテ　カっテ　ホスマデ　ホトンド

イっポンイっポン　テニ　カケタ　イネガ　コノ　キカイデ

ミルミル　カタズケラレテ　イク　イネカケカラ　ハコバレタ

イナタバノ　ヤマガ　カタハシカラ　へっテ　ウシロニワ

ワラノ　ヤマガ　ツマレ　マエニワ　カキダサレタ　モミガ

コガネノ　コヤマオ　キズク

アサノ　シモモ　ワスレタ　ヨオニ　マヒルノ　タイヨオガ

カガヤイテ　ヒナタニ　シイタ　ムシロノ　ウエニワ　ネコガ

ホカホカト　アタタカソオニ　ネムっテ　イル　ミチバタノ

五十頁

カレタ　クサムラノ　ソコカラ　カスカニ　ゴク　カスカニ

ムシノ　ネガ　キコエル　ヨオニ　オモウノワ　ソラミミデ

アロオカ　タイテエノ　モノワ　カレテ　チャイロニ　ナっテ

イル　ナカニ　コズエニ　スズナリノ　カキガ　アカアカト

テっテ　イル　ユズノ　ミガ　ミズミズシク　キンイロニ

カガヤイテ　イル　ダイコンヤ　ナタネノ　ハノ　ミドリガ

イキイキト　ハタケニ　ツズイテ　イル

ゴゴニ　ナルト　マモナク　ウスラサムク　ナル　ナガク

クロク　ヒク　モノノ　カゲガ　シダイニ　ウスレテ

タイヨオワ　クモルトモ　ナク　カガヤキオ　ウシナっテ

イク　ヨジオ　スギレバ　モオ　ユウガタダ　ヨワヨワシイ

ヒガ　トオイ　ヤマノ　ハシニ　カカル『―』

ヒガ　オチテ　ニシノ　ソラワ　ユウバエガ　ヒトキワ

ウツクシイ『カキネニ　サキノコツタ　ニサンリンノ

コスモスノ　ハナガ　ユウヤミニ　カスカニ　ウイテ　ミエル『―』

ドコカデ　タキビノ　ニオイガ　スル『ヤガテ　アタリワ

ヤミニ　ツツマレテ　イク』

〔甲〕

(イ) 發音『脫穀機』ダツコクキといつてもダツコつキといつても耳に聞こえる結果は僅かの差である。コスモス、原語(英語 cosmos)ではコズモスの様にズ(z)を有聲(濁音)にいふわけであるが、日本語ではス(s)を無聲音(清音)にいふのが慣用である。

(ロ) アクセント　アサヒ、近來アサヒといふ人が增して來た様である。本書卷一・二十四頁、卷五・百六頁の記事參照。カリトラレテ、又はカリトラレテともいふ。シモノ「ノ」の附く形は平板式である。ミルミル、又はミルミルともいふ。イナタバノ、又は平板式にもいふ。ムシロノ、「ノ」の附く形は平板式であるが、その他はムシロ、ムシロガ等である。アカアカト、又はアカアカト。ゴゴ又は平板式。カガヤキオ、又はカガヤキオともいふ。

〔乙〕

各段の終の休止(本文『―』此の符號の處)は餘り短過ぎない様にいふ。ゆつくり晚秋の夕暮の靜けさを味ふ心を表すに、本文の發音の速度よりも休止の長短の方が一層表現の効果を得るものである。『耕して、植ゑて』云々の切れ目は極わづか切るのがよい。『かすかにくごくかすかにく』の間くの所は「休止」を置く。聲を稍弱くいふと良い。

ダイ　ク『ダイエンシュウ』

イチ『』

五十二頁

バカ　バカ　バカト　ンマノ　ヒ|ズメノ　オト|ガ　シテ|キタト
オモウト|　キ△ヘエノ　イっタイガ　イサ|マシク△
ワタ|クシタチノ△　マエオ　トオリスギ|マシタ△
グ|ンタイガ　コ|ンヤ　コノ　マチ|オ　ト|オルノデ|　ワタクシワ△
オカ|アサンニ　ツレラレテ|　ユウガタカラ　ユ|チャ
セっタイジョエ　テツダイニ　キタ|ノデシタ△
ヤガテ　マタ|　ゴオゴオト　スサマジイ　オトオ　タテテ|
スウダイノ　セ|ンシャガ　キマ|シタ△　モノスゴイ　ジヒビキニ
オド|ロイテ|　マチノ△ヒトビトワ　ミ|ナ　トビダ|シテ
キマ|シタ△　ツズイテ　ホヘエガ　チカ△ズイテ　キマ|シタ△
チョオド　セっタイジョノ　マエデ|　タイチョオガ|

五十三頁

ニジっプ|ンカン　キュウケエ>ト　ゴオレエオ　カケ|マシタ△
ヘエタイサンワ|　ヤ|レ　ウレ|シヤト　バ|カリ|　ワタ|クシタチノ△
マ|エエ　オシ△カ|ケテ　キマ|シタ△
ゴク|ロオサマ|　オツカ△レデ|ショオ>ト　イタワリナガラ|
ザイゴオグ|ンジンヤ|　フジ|ンカイヤ　ジ|ョシ　セエネンダンノ
ヒト△ビトガ|　ナランデ　ムギ|ユオ　ツイデ　アゲテ　イマ|ス|
ホコリト　ア|セデ　マっク|ロニ　ナ|っタ　ヘエタイサンガ|
コノ　スイト|オニモ　イレテ　クダサイ|　コレ|ニモ|
コレ|ニモ>ト　ダサレ|ルノデ|　ワタ|クシタチワ△　イソ|ガシクテ△△
メ|ガ　マワル　ヨ|オデス|
コオシテ△　ア|トカラ　ア|トカラ　ク|ル　ヘエタイサンオ

五十四頁

ムカエテ　トオトオ　ヨルノ　ジュウイチジゴロマデ
ハタラキマシタ』

〔甲〕

(イ) **發音**　スサマジイ、「ス」に母音無聲化を起し易いが、有聲にいふ方がはつきりして良い。マエエ、『前へ』は日常の言葉で屢々マイエと發音される。此處はマエエがよい。イソガシクテ、此の語だけはゆつくり發音しても母音無聲化の音節が二つ續く。

(ロ) **アクセント**　バカバカ、アクセント不定。此處は「バ」を高くいつてよい。シテ|キタ、別々にはシテ(平)　キタであるが、續けては本文表記の型でいふ。スウダイ、又はスウダイといつてもよい。ミナ、又は平板式にもいふ。イタワリナガラ、イタワルはイタワルとも平板式にもいふ。平板式の時は　イタワリナガラ　と全體平板式にいふ。ジョシ　セエネンダン、續けては　ジョシセエネンダンの型でいふ。ホコリ『塵』は平板式。比較ホコリ、ホコリト(誇)。

五十五頁

〔乙〕

ヤガテマタの次で切る方がよい。原文の讀點(、)とちがつても已むを得ない。ヤレ、ウレシヤ、「ヤレ」の方を強める。『お疲れでせう』の終の調子は尻上りでも尻下りでもよい。『婦人會や』の次は切らない方がよい、次の『人々』にかゝるからである。『此の水筒にも』の『此の』を強める。「他の水筒にも入れたと同樣」といふ意味を表す。「にも」でその意味がわかる筈である。

『目がまはる』を強める。『十一時頃』を強める。

二

ヨノ　アケヌ　ウチカラ　キタノ　ホオデ　ジュウセエガ
キコエマシタ　ワタクシタチ　ジョシノ　クミモ　センセエニ
ツレラレテ　ダイエンシュウノ　ハイカンニ　デカケマシタ『—』
ヒコオキガ　イサマシイ　オトオ　タテテ　スウダイ　トンデ

キマシタ　トキドキ　ミミオ　ツンザク　ヨオナ　タイホオノ
オトガ　シマス　ソノ　タビニ　ハヤク　トンデイッテ
ミタイ　ヨオナ　キガ　シマシタ
ケサワ　シモガ　タクサン　オリテ　サムイ　キタカゼガ
ビュウビュウ　フイテ　イマス　ハイカンニ　キタ
ヒトビトワ　ミナ　ガイトオノ　エリニ　クビオ　ウズメテ
イマシタ　ナカニワ　タキビニ　アタッテ　イル　ヒトモ
アリマシタ

五十六頁

ヤガイ　トオカンブオ　トオク　ノゾム　トコロデ
ワタクシタチワ　ハイカンシテ　イマシタガ　ドコデ
タイホオオ　ウッテ　イルノカ　ワカリマセン　タダ

ホヘエガ　キノ　コエダヤ　ワラオ　セオッテ　ドテノ
カゲオ　カケテ　イクノオ　ミマシタ　キヘエガ　ツチオ
ケッテ　ハシルノオ　ミマシタ　タタカイノ　ヨオスワ
イッコオ　ワカリマセン

五十七頁

ヤガテ　ヤガイ　トオカンブエ　テンノオキオ　オススメニ
ナッテ　ゴトオカンノ　ダイゲンスイヘエカガ　オデマシニ
ナリマシタ　サイケエレエオ　シテカラ　アオギ　ミマスト
カゼアタリノ　モットモ　ツヨイ　コオチデ　アリナガラ
ヘエカワ　ガイトオオモ　メサレズ　ネッシンニ
センキョオオ　ゴランニ　ナッテ　イラッシャイマス　ソレオ
ハイシタ　トキ　ワタクシタチワ　ナントモ　イワレヌ

五十八頁

カンジガ シテ メガ ナミダデ イっパイニ ナリマシタ『
ハイカンノ ヒトビトモ イマワ ガイトオオ キテ イル
モノワ ヒトリモ アリマセンデシタ』 タキビモ
イツノマニカ キエテ イマシタ』

〔甲〕

(イ) **發音** オススメニ(五十六頁八行)、始めのスに母音無聲化を起し易いが、有聲にいふ方がはつきりして良い。『大元帥』の「元」をゲに發音してもよい。「元帥」を獨立の單語と考へる時「ゲ」が語の首に當るのでゲ音を發するのである。

(ロ) **アクセント** スウダイ、又はスウダイ。トンデイっテ、多くは續けて此の型でいふ。別々にはトンデ(平) イっテ(平)である。アオギ、又はアオギ。モっトモ、又はモつトモといふ人もある。ネつシンニ、又はネっシンニといふ人もある。

〔乙〕

陛下の御有樣を述べる處はやゝゆつくり、謹んでいふべきである。『何ともいはれぬ』に特に感情をこめていふのが良い。

五十九頁

サン』

キョオワ ヘエタイサンガ ワタクシノ イエニモ トマルト
ユウノデ イソイデ ガっコオカラ カエっテ キマシタ』
スルト モオ ヘエタイサンワ キテイテ ヘエキノ
テイレオ スマシ クツシタオ アラっタリ クツオ
ミガイタリ シテ イマシタ』
オユカラ アガっテ イキカエっタ ヨオダ>ト イっテ
イル ヘエタイサン ソノ ソバデ ジュウヤ ケンオ
ミセテ モラっテ オオヨロコビノ オトオト ユウハンノ
シタクニ イソガシイ オカアサン』 ワタクシモ

六十頁

ヘエタイサンノ　クツシタオ　ヒニ　アブってテ　カワカシテ
アゲマシタ‖
ユウショクゴ　ヘエタイサンカラ　アタラシイ　ヘエキニ
ツイテ　オモシロイ　オハナシオ　キキマシタ‖　オトオサンモ
カンシンシテ　ジブンノ　イってイタ　コロトワ　スっカリ
カワっタ‖　ススンダ　モノダ>ト　イワレマシタ‖
ヨクチョオワ　ハヤク　オキテ　シュっパツノ　シタクオ
シテ　アゲマシタ‖　オバアサンワ　ツカレナイ　ヨオニト
ヤイタ　スルメヤ　コオリザトオオ　カミニ　ツツンデ
アゲラレマシタ‖
マダ　アケキラヌ　ソラニ　マタタク　ホシオ　アオギナガラ

六十一頁

オトオサンニ　ツイテ　ワタクシモ　マチカドマデ　オオクリ
シマシタ‖　ミナガ　バンザイ　バンザイ>ト　チョオチンオ
アゲルノニ　コタエテ　ヘエタイサンタチモ　バンザイ
バンザイ>ト　サケビナガラ　イキマシタ‖　ワタクシタチワ
ソノ　イサマシイ　スガタオ　イツマデモ　ミオクっテ
イマシタ‖

〔甲〕(イ) **發音**　特に記すべきことなし。

(ロ) **アクセント**　キテイテ、多くは續けて此の型でいふ。別々にはキテイテ(平)である。イつテイタ、多くは續けて此の型でいふ。別々にはイつテ(平)　イタ(平)である。アオギナガラ、サケビナガラ、『ナガラ』の無い形はアオグ、サケブである。ミナガ『皆』を名詞の様に使ふ時は此の型である。參考、ミンナガも同じ。イツマデモ、又はイツマデモと

いつても良い。

〔乙〕『お湯から上つて』の次は必ず切らなければならない。切らないと、音聲を聽いただけでは兵士の言葉の一部分の様に聞える。『やうだ』の次は必ずしも切らないでよい。父の言葉『すつかり』を強める。『おばあさんは』の次も必ず切る。切らないと「お祖母さんが疲れる」様に聞える。『疲れないやうにと』の次でも必ず切る。切らないと燒き方の說明の様に聞える。萬歲は一々切る方がよい。

六十二頁

ダイ　ジュウ　キク

キノハガ　オチテ　サビシイ　ニワニ　サキノコル　キクノ

ハナヨ

ケサモ　シツトリ　ツユニ　ウタレテ　ウツブシタ　ハナノ

六十三頁

オモサ

ソツト　オコシテ　タテテ　ヤつタラ　ユビサキニ　ツイタ

ニオイ

カミノ　トオトイ　ミココロナノカ　アア　キクノ　タカイ

ニオイ

〔甲〕(イ) 發音　特に記すべきことなし。

(ロ) アクセント　キノハガ、一語として扱ふ。別々にはキノ　ハガ(平)である。オチテ、參考、オチル。ハナノ「ノ」の附く形は平板式である。タテテ、參考、タテル。

〔乙〕第二節末行『花の』の次で一寸切つてもよい。『あゝ』の次で切る。

ダイ　ジュウイチ　ヒヨドリゴエ

六十四頁

ヘエケノ　グンゼエ　ジュウマンヨキ　イチノタニニ　シロオ
カマエテ　ゲンジノ　タイグンオ　フセグ　ウシロワ　ヤマ
ケワシク　マエワ　ウミ　チカクシテ　マモリ　カタケレバ
ゲンジモ　サスガニ　セメアグミテ　ミエタリ
タイショオ　ミナモトノ　ヨシツネ　オモウ　ヨオ　テキワ
ケワシキ　ヤマオ　タノミテ　ウシロノ　ソナエオ　オコタリ
オラン　ワレ　テキノ　ハイゴオ　ツカントテ　ヒソカニ
サンゼンヨキオ　ヒキツレ　ウシロヨリ　ヤマオ　ツタイテ
ヒヨドリゴエニ　イズ　ミオロセバ　イクヒャクジョオノ

六十五頁

タニワ　アタカモ　ビョオブオ　タテタルガ　ゴトシ
タイショオ　ココロミニ　スウヒキノ　ンマオ

六十六頁

オイオトシタルニ　アルイワ　コロビテ　タオルルモ　アリ
アルイワ　アシオ　オリテ　シヌルモ　アリ　サレド
サンビキワ　ブジニ　クダリ　ミブルイ　シテ　タチアガレリ
タイショオ　コレオ　ミテ　ノリテガ　ヨオジン　スルナラバ
ンマモ　ケガワ　ナカルベシ　イザ　ススメ　ヨシツネオ
テホンニ　セヨトテ　マっサキニ　カケクダレバ
サンゼンヨキ　ンマオ　ナラベテ　カケクダル
コイシマジリノ　スナナレバ　ナガルル　ヨオニ　スベル
コト　ニチョオヨニシテ　ヤヤ　タイラナル　トコロニ
クダリツキヌ
サレド　コレヨリ　シタ　ジュウシゴジョオバカリワ　コケ

六十七頁

ムシタル　ガンセキ　カベノ　ゴトク　ツタチタリ　イマワ
サキエモ　ススマレズ　ウシロエ　ヒカン　ヨオモ　ナシ
ツワモノドモ　ミナ　カオオオ　ミアワセ　タダ
アキレイタルニ　サワラノ　ジュウロオ　ヨシツラ
ススミイデ　ワレラニワ　カカル　トコロモ　ヘエチニ
オナジ　ススメヤ＞トテ　マっサキニ　カケススメバ
サンゼンヨキモ　ツズイテ　クダル　コエオ　シノバセ
ンマオ　ハゲマシツツ　ナダレノ　ゴトク　クダル　サマ
ヒトワザトモ　オモワレズ
クダルヤ　イナヤ　サンゼンヨキ　イチドニ　ドっト　トキオ
アゲテ　ヘエケノ　シロニ　ヒオ　ハナツ　テキワ　ハタシテ

フイオ　ウタレ　アワテ　フタメキツツ　フネニ　ノリテ
ミナ　チリジリニ　ニゲユキタリ

〔甲〕

(イ) **發音**　『軍勢』文語文では特に「グンゼイ」といつても良いであらう。『如し』はその前で聲を切ることがある故に、獨立の單語と考へてよいが、常に他の語の次に使はれ、屢々續けて發音されるため「ゴトシ」と「ゴ」の音を使ふ。

(ロ) **アクセント**　ジュウマンヨキ、サンゼンヨキ、又はジュウマンヨキ、サンゼンヨキといつてもよい。マモリ　カタケレバ、又は續けてマモリカタケレバ。オコタリ　オラン、又は續けてオコタリオラン。アルイワ、又はアルイワといふ人もある。コロビテ、又はコロビテ。ヨオジンスルナラバ「ナラバ」を強める時ヨオジンスルナラバといふこともある。ヘエチ、又はヘエチ。

〔乙〕

此の文語文の朗讀も第六くりから谷と同じである。『背後を突かん』の

次『とて』へ移る所は切らないでよい。『手本にせよ』の次も切らないでよい。『進めや』はやゝ聲を大きくいふ方がよい。從つてその次で切る方が言ひ易いであらう。

六十八頁

ダイ　ジュウニ　フリコドケエ

イタリヤノ　ピサノ　マチニ　ユウモヤガ　コメテ　ヒガシズカニ　オチテ　イク　コロデシタ

ガリレオト　ユウ　ガクセエガ　ココノ　ユウメエナ

ダイジインエ　オマイリオ　シマシタ　ジインノ　ナカワモオ　ウスグラク　ナッテ　イマシタ　チョオド　イマ

バンニンガ　ランプニ　ヒオ　ツケタ　バカリノ

六十九頁

トコロデシタ

テンジョオカラ　ツルシテ　アル　コノ　オオキナ　ランプガ

フト　ガリレオノ　ココロオ　トラエマシタ

オヤ＞ト　オモイナガラ　カレワ　ソコニ　タチドマッテ

ジット　ミツメマシタ　ツルシタ　ランプワ　シズカニ

サユウエ　ウゴイテ　イマス　ソレワ　ツイ　イマシガタ

バンニンガ　ヒオ　ツケル　タメニ　テオ　フレタカラデス

ガリレオガ　フシギニ　オモッタノワ　ソノ　ランプノ

七十頁

ウゴキカタデシタ　ヒダリカラ　ミギエ　ミギカラ

ヒダリエト　イッタリ　キタリ　スルノニ　ソノ　イッカイ

イッカイノ　ジカンガ　ドオヤラ　オナジデ　アル　ヨオニ

七十一頁

オモワレテ　ナリマセン
ナニカヂ　タメシテ　ミル　ホオホオワ　ナカロオカ
シバラク　カンガエテ　イタ　ガリレオワ　ヤガテ　ジブンノ
ミャクオ　トっテ　ミマシタ
ヤっパリ　ソオデシタ　ランプガ　イっカイ　ウゴクノニ
ミャクガ　フタツ　ウツト　ツギノ　ウゴキニモ　ミャクワ
フタツ　ウチマス　オドロイタ　コトニワ　ランプノ
ウゴキガ　シダイニ　チイサク　ナっテ　ノチニワ　カスカニ
ユレル　ダケデスガ　ソレデモ　イっカイノ　ウゴキニ
ヤハリ　ミャクワ　フタツ　ウツト　ユウ　グアイデシタ
ガリレオワ　イソイデ　ウチエ　カエリマシタ　ソオシテ

七十二頁

イトニ　オモリオ　ツケ　ソレオ　ツルシテ　カレワ
オナジヨオナ　コトオ　ナンベント　ナク　ヤっテ　ミマシタ
オモリオ　イトデ　ツルシテ　ソレオ　ウゴカスト　オモリワ
サユウエ　フリマス　ソノ　イトオ　ミジカク　スレバ
フリカタガ　ハヤク　ナガク　スレバ　フリカタガ　オソク
ナリマス　シカシ　イトノ　ナガサオ　イチメエトルナラ
イチメエトルニ　キメテ　オクト　オモリ　ソノモノワ
オモクテモ　カルクテモ　マタ　オオキク　ウゴカシテモ
チイサク　ウゴカシテモ　フル　ジカンワ　オナジデス
コレオ　フリコノ　トオジセエト　イイマス
ジュウハっサイノ　ガクセエ　ガリレオワ　コノ　コトオ

ハっケンシタノデシタ』　イマカラ　サンビャク
ロクジュウネンバカリ　ムカシノ　コトデス』―』
コノ　ハっケンガ　アっテカラ　シチジュウネンアマリ
スギテ　オランダノ　ホイヘンスト　ユウ　ヒトガ
イママデニ　ナイ　セエカクナ　トケエオ　ハツメエ
シマシタ』ソレワ　マっタク　ガリレオノ　コノ　ハっケンオ
オオヨオシタ　モノデス』ツマリ　トケエノ　キカイニ
フリコオ　シクンダ　モノデ　コレガ　フリコドケエノ
ハジマリデス』

〔甲〕

(イ) **發音**　次のアクセントと共に記す。

(ロ) **アクセント**　ピサ、日本語ではピの母音が無聲化するためサを高くい

〔乙〕

ふ。原語(イタリア語 Pisa)に近くいへばピーザである。ガリレオ、日本語では又平板式にいつてもよい。原語(イタリア語 Galileo)に近くいへばガリレーオである。従つて、ガリレオの型が原語に近いわけである。ホイヘンス、原語(オランダ語 Huygens)のアクセントに従ふ。オヤ、アクセント不定。此處はヤを高く尻上りにいふのが良い。ウゴキカタデシタ、又、ウゴキカタデシタ。ジカン、又は平板式にもいふ。ナガサ、又はナガサ。ソノモノワ、又はソノモノワ。

『其のランプの動き方でした』の『動き方』を強めることに注意。『同じである』(七十頁二行)を強める。『やつぱり』を強め、『次の』を強める。『二つ打つといふぐあひでした』の次は休止を置くべき處であらうけれども「急いで歸つた」のであるから、休止は短くする方がよい。『さうして』の次で切る。切らないと、「おもりを附ける」附け方の説明の様に聞える。『此の事を發見』(七十三頁一行)を強める。その前の『ガリレオは』を強めては良くない。もし『ガリレオが』とあるならば之を強めるべきであらうが、

此處はさうでない。終の『これが』此の意味で强めるべきである。

ダイ　ジュウサン　チイサイ　デンレエシ

七十四頁

ショオワ　ロクネン　ジュウニガツ　サンジュウ　イチニチノ
ユウグレ　ダイセっキョオ　シュビタイノ　キュウシャエ
チニ　ソマっタ　イチワノ　ハトガ　トンデキタ
トリアツカイヘエガ　スグ　ダキアゲテ　アシノ　バンゴオオ
ミルト　ヨっカ　マエニ　キンシュウエ　ムケ

七十五頁

シュっバツシタ　ワガグンニ　ツレラレテ　イっタ
グンヨオバトデ　アっタ　シンショカンワ　チニ　マミレ
ミニワ　ジュウショオオ　オオテ　イキモ　タエダエデ

アっタ

キンシュウエ　ムカっタ　ワガグンワ　サンジュウニチ
トツゼン　ユウセエナ　テキグンニ　デアイ　ハゲシク
タタカっタ　ハヤク　コノコトオ　ダイセっキョオ
シュビタイエ　シラセヨオト　シタガ　デンシンモ　デンワモ
テキノ　タメニ　コワサレ　ツウシンワ　タダ　ハトニ
タヨル　ホカワ　ナカっタ

七十六頁

ツウシンシオ　ツメタ　アルミニュウムノ　カンオ　ハトノ
ミギアシニ　トリツケタ　ヘエワ　シバラク　ハトノ
カラダニ　ホオオ　スリツケ　トチュウノ　ブジオ　イノっタ
チイサイ　デンレエシワ　ムネオ　フルワセ　カワイイ　メデ

ソラオ　ミアゲテイタ

タタカイノ　マっサイチュウ　ハトハ　ソラ　タカク

マイアガっタ　ニサンカイ　ジョオクウニ　ワオ　エガイテ

トンデイタガ　ヤガテ　ホオコオオ　ミサダメ　ヤノ　ヨオニ

トビサっタ

オチイク　ユウヒオ　セニ　ウケ　サムゾラオ　モノトモ

セズ　トオナンオ　サシテ　トンデイタ　ハトワ　フト

タカノ　イチグンオ　ミタノデ　スバヤク　テエクウニ

ウツっタ　スルト　コンドワ　テキグンニ　ハっケンサレ

タチマチ　イっセエシャゲキオ　ウケタ　イチダンワ　ハトノ

ヒダリアシオ　ウバイ　イチダンワ　ソノ　フクブオ

七十七頁

ツラヌイタ

コノ　オモイ　キズニモ　クっセズ　ハトワ　ナオ　シバラク

トビツズケタガ　ツイニ　タエカネテ　トアル　キノ　エダニ

トマっタ

タマタマ　ソノ　フキンニ　イタ　ワガグンノ　ヘエガ

コレオ　ハっケンシタ　ツカマエヨオト　シテ　テオ

サシノベルト　ハトワ　フタタビ　ツバサオ　ヒロゲテ

トビアガっタ　トビサっタ　アトノ　キノ　エダニワ

イタマシクモ　アカイ　チガ　ツイテ　イタ

ヨワリハテタ　コノ　ショオデンレエシワ　ソノヨ　ドコデ

ヤスンダ　コトカ　ヨクジツニ　ナっテ　ヨオヤク

七十八頁

ダイ|セっキョオノ　ジブンノ　キュウシャニ
タドリツイタノデ　ア|ル』
ダイセっキョオ　シュビタイデワ　サっソク　シンショカンオ・
トリハズシ　テアツク　カンゴ　シタガ　ニンムオ　ハタシテ
キガ　ユルンダノカ　ハトワ　トリアツカイヘエノ　テニ
ダカレタ　ママ　ツメタク　ナっテ　シマっタ』
シカシ　コノ　ホオコクデ　テキジョオワ　アキラカニ
ナっタ』　ソオシテ　マモナク　ワガグンワ　キンシュウオ
センリョオシタ』

〔甲〕

(イ) 發音　『移つた』(七十六頁末行)ウッつタのッに母音無聲を起すのが通常である。有聲にもいふ。こゝは有聲にいふ方がはつきりして良

七十九頁

い。

(ロ) アクセント　ショオワ、下に「六年」等の年數をいふ時は多く平板式にいひ、從つて、續けてはショオワロクネンの樣にいふ。「昭和」一つ離していふ時ショオワといふことが多い。ヨっカ　マエニ、續けてはヨっカマエニの樣にいふ。ワガグン、別々にはワガ　グンである。多くは續けていひ、グが高くならない。しかし發音はグで、グを發音しない。ツレラレテ　イっタ、又は續けてツレラレテイっタの樣にもいふ。マミレ、又は平板式にいふ人もある。コノコトオ、又はコノコトオ、別々にはコノ(平)　コトオ。デンワモ、又はデンワモといふ人もある。トンデイタガ、別々にはトンデ(平)　イタガ。イチグンオ、又はイチグンオといふこともある。ウッつタ、ッに母音無聲化を起す時はウッつタといふ。ヨワリハテタ、又はヨワリハテタともいふ。參考、ヨワリハテル(平)、又はヨワリハテル。

〔乙〕

『一羽の鳩が』この鳩の方を比較的強める方がよい。『四日前に』から『軍

用鳩であつた』までは意味の上から聲を切るべき處が無い。強ひて切るならば『我が軍に』の次か『行つた』の次であらう。『鳩に』(七十五頁七行)を強める。『小さい傳令使』は次で切る方がよい。『かんごしたが』の次と『ゆるんだのか』の次の切り方をやゝ長くし『鳩は取扱兵の手に』云々をやゝゆつくりいふと感じがよく表現されるであらう。

八十頁

ダイ　ジュウシ　ジドオショっキ

メエジ　ニジュウ　サンネン　トオキョオニ　ハクランカイガ
ヒラカレタ　トキノ　コトデ　アル　イナカモノラシイ
ヒトリノ　セエネンガ　マイニチ　マイニチ　キカイカンニ
キテワ　ソコニ　チンレッシテ　アル　キカイノ　マエニ
スワっテ　ジっト　ソレニ　ミイっテ　イルノデ　アっタ

八十一頁

カカリノ　ヒトビトワ　トオトオ　カレオ　アヤシイ　モノト
ニランデ　トリシラベタ　シラベテ　ミルト　キチガイデモ
ナンデモ　ナカっタ　ヒジョオナ　キカイズキデ　シカモ
アイコクシンノ　ツヨイ　セエネンデ　アっタ
カレワ　ソコニ　ナラベテ　アル　キカイオ　ユビサシテ
コレワ　ミナ　ガイコクヒン　バカリデワ　ナイカ　コンナ
コトデ　ニっポンノ　ショオライオ　ドオ　スル　イマニ
ワタクシワ　リっパナ　コクサンヒンオ　ツクっテ　キっト
ガイコクヒンオ　オイハラっテ　ミセル>ト　カタイ
ケっシンオ　カタっタ　コノ　セエネンコソ　ノチニ
ジドオショっキオ　ハツメエシテ　セカイノ

八十二頁

コオギョオカイニ　ナオ　トドロカシタ　トヨダ　サキチ
ソノ　ヒトデ　アっタ
サキチワ　シズオカケンノ　イナカニ　ンマレタ　ハジメ
ダイクト　シテ　ハタライテ　イタガ　ソノ　ウチニ
ショっキノ　カイリョオオ　オモイタチ　ヒマサエ　アレバ
ホオボオノ　オリバオ　ミテ　アルイタ　トキニワ　キカイオ
コワシタト　イっテ　シカラレ　ムラノ　セエネンタチカラワ
オトコノ　クセニト　アザケラレタ　コオシタ　クシンオ
カサネテ　サキチワ　モクセエノ　カイゾオショっキオ
ツクっタガ　ジっケンシテ　ミルト　シっパイデ　アっタ
ソレ　ミタ　コトカト　ヒトビトワ　アザケリ　ワラっタ

八十三頁

シカシ　サキチワ　ナント　イワレテモ　タダ　ダマっテ
ケンキュウノ　ホオ　ススメタ　ハクランカイオ　ミニ
イっタノモ　コノ　コロノ　コトデ　アっタ
カエっテカラノ　カレノ　ドリョクワ　イっソオ
メザマシカっタ　ソオシテ　ヨクネンニワ
モクセエショっキノ　カイゾオニ　ミゴト　セエコオシタ
ニジュウ　シサイノ　トキデ　アっタ
ソノノチ　サキチワ　サラニ　ドオリョクオ　シヨオスル
ショっキノ　ハツメエニ　セエコオシテ　ソレガ　ヒロク
セケンニ　シヨオサレル　ヨオニ　ナっタ　アル
カイシャデワ　コノ　ショっキト　ガイコクセエノ

八十四頁

ショっキトオ　イチネンニ　ワタっテ　タメシテ　ミタガ
ザンネンニモ　サキチノ　キカイワ　ガイコクセエニ
オヨバナカっタ
サキチワ　ナミダオ　ナガシテ　クヤシガっタ　サラニ
サンネンノ　ノチ　ガイコクヒンニ　マサル　モノオ
ドオニカ　ツクリアゲル　コトガ　デキタ
シカシ　コノ　セエコオニ　マンゾクシテ　シマウ
サキチデワ　ナカっタ　カレワ　ホトンド　ソノ
イっショオオ　ショっキノ　カイリョオニ　ササゲタ
タイショオ　ジュウサンネン　カレワ　ツイニ　セカイムヒノ
ジドオショっキオ　ハツメエシタ　ソレワ　タテイトガ

八十五頁

キレレバ　ジドオテキニ　ウンテンガ　トマリ　ヨコイトガ
ナクナレバ　ジドオテキニ　コレオ　オギナウ　シカケニ
ナっテ　イル　キカイデ　ヒトリデ　シゴジュウダイオ
トリアツカウ　コトガ　デキル　カレガ　ショっキノ
ケンキュウオ　ハジメテカラ　サンジュウネン　キチガイト
イワレ　ヒンクト　タタカイ　アラユル　コンナンニ　タエテ
ツイニ　コノ　セエコオオ　ミタノデ　アル

八十六頁

ハツメエニ　タイスル　カレノ　ネっシンワ　マコトニ
オドロクベキ　モノガ　アっタ　アサリ　ダレヨリモ　ハヤク
オキテ　ケンキュウシツニ　イリ　ヨルモ　オソクマデ
トジコモっテ　イルノデ　カゾクノ　ヒトワ　カレガ　イツ

八十七頁

ネタカモ　シラナイ　コトガ　オオカっタ』
コンナ　コトモ　アっタ』　イツモノ　ゴトク
ケンキュウシッニ　ハイっタ　サキチワ」　ヒガ　クレテモ
デテ　コナイ」　ヨナカ　スギテモ　デテ　コナイ』　ツイニ
ヨガ　アケテ　ニワトリガ　ナイタ』　ヒガシノ　ソラニ
アサヒガ　ノボっタ』　カゾクノ　モノガ　シンパイシテ
ケンキュウシッエ　イっテ　ミルト」　トタンニ　サキチワ
ズメンオ　カタテニ　イキオイヨク　トビダシテ　キタ』
ソオシテ　イっサンニ　コオジョオエ　ハシっテ　イっタ』
オイ　ダレモ　イナイカ>ト　サキチワ　サケンダ』
コオジョオワ　ガラント　シテ　イル』　アトカラ　ツイテ

八十八頁

イっタ　カゾクノ　モノガ　キョオワ　ガンジッデ
ゴザイマス>ト　イっタノデ　ハハハ　ソオダっタカ>ト
タイショオシタ』
サキチワ」　ヨドオシ　カンガエタ　コトオ　ジっサイニ
ツクラセヨオト　オモっテ」　ガンジットモ　シラズ
トビコンダノデ　アっタ』

〔甲〕

(イ) 發音　ススメタ（八十二頁八行）の始めのスに母音無聲化を起し易いが、有聲にいふ方がよい。ニジュウ　シサイ「二十四歳」（八十三頁三行、ニジュウ　ヨンサイ　といってもよい。『おぎなふ』はオギノオでない、オギナウである。

(ロ) アクセント　ミイっテ、又はミイっテといふこともある。ガイコクヒン、又は平板式にもいふ。コクサンヒン、又は平板式にもいふ。カイ

シャ「會社」、又は平板式にいふ人もある。タイショオ　ジュウサンネン、大正十五年ならばタイショオ　ジュウゴネンである。セカイムヒノ、別々にしてセカイ　ムヒノといつてもよい。シゴジュウダイ、時としてシゴジュウダイといふこともある。ネつシン、又はネつシン。ヨナカ「てにをは」の附く形はヨナカニ、ヨナカデ等である。イつサンニ、又はイつサンニ。ハシつテ「シ」に母音無聲化を起す時はハシつテの型でいふ。

〔乙〕

『愛國心の強い』を強め、その次の『青年で』を強めない樣注意。『これは皆』の次の『外國品』を強める。『どうする』を強める。『それ見た事か』の『それ』を強める。『涙を流して』を強めることを忘れない樣注意。『驚くべき』（八十六頁一行）を強める。『おい』の次は切らないでよい。急いでいふ場合だからである。『居ないか』の終は尻下りの調子。『さうだつたか』の終も尻下りの調子。

ダイ　ジュウゴ　フクジュソオ

フクジュソオ　トコニ　カザレバ　ホンノリト　キュウニ
アカルイ　ヘヤノ　ナカ
フユノ　ヒニ　キイロイ　ハナワ　ヨロコビノ　アフレル
ヨオニ　イキイキト
ハハト　マタ　エガオ　カワシテ　ハナノ　カズ　ツボミノ
カズオ　ヨンデ　ミル

〔甲〕

（イ）發音　特に記すべきことなし。

（ロ）アクセント　ヨロコビノ、又はヨロコビノともいふ。ハハト、又はハハトといふ人もある。

〔乙〕全體をやゝゆつくりいふ外特に變化を附けるべき處は無い。

九十頁

ダイ　ジュウロク　スキイ

コユキガ　イクニチモ　フリツズイテ　ノモ　ヤマモ
マつシロニ　ウズメツクシテ　シマつタ　ボクタチワ
マイニチ　マイニチ　スキイオ　ハイテ　カケマワつテ
イタガ　モオ　ムラノ　キンジョデワ　オモシロク
ナクナつタノデ　キョオワ　アサカラ　ノダセンセエニ
ヤマノ　スキイジョオエ　ツレテイっテ　イタダイタ
ムラハズレノ　ツジドオノ　エンニ　ボクタチガ　マっテ
イルト　ヤガテ　スキイオ　カツイダ　センセエガ

九十一頁

イラつシャっテ　ニコニコ　シナガラ　ヤア　ミンナ
ハヤイネ〉ト　ゲンキナ　コエデ　オつシャっタ
スキイジョオマデワ　ノボリミチデ　ゴキロメエトルバカリ
アル　ユキワ　イチメエトルモ　ツモっテ　イル　センセエワ
イツモ　マっサキニ　タタレテ　キュウナ　サカニ　カカルト
ヤア　エイ　ヤア　エイ〉ト　カケゴエオ　カケテ
ボクタチオ　ハゲマサレタ
カラマツノ　ハヤシオ　ヌケテ　コマツバラニ　カカルト
ダレカガ　ヤア　ウサギ　ウサギ〉ト　オオゴエニ　サケンダ
ミルト　オオキナ　ウサギガ　チョオド　コマツノ　ナカエ
トビコンダ　トコロダ　アトニワ　マツノ　エダカラ　ユキガ

九十二頁

九十三頁

コボレテ　イタ　コマツバラオ　ヌケルト　スキイジョオダ
コノヘンデワ　ユキガ　ニメエトルジカクモ　アっテ　タダ
イチメンノ　ギンセカイ　ココロヨイ　ケエシャガ
イクカショト　ナク　ナラビ　ツズイテ　イル
ボクタチワ　ケエシャオ　ノボリハジメタ
ゴジュウメエトルホド　ノボルト　ボクワ　モオ　タマラナク
ナっテ　マイチモンジニ　スベリクダっタ　スバラシイ
ソクドガ　ツイテ　スキイガ　ウナル　クウキガ　ミミモトデ
ウナル　イっシュンデ　タニソコダ　キュウテエシシテ
フリカエルト　ナカマワ　マダ　ズンズン　ノボっテ　イク
ヤガテ　ヒャクメエトルモ　ノボっタト　オモウト

九十四頁

イっセエニ　スベリハジメタ　ハヤイ　ハヤイ　ミルミル
カオガ　ハっキリ　シテ　クル　オモイオモイノ　アトオ
ツケナガラ　コトリノ　ヨオニ　マイクダリ　コキケムリオ
タテテ　テエシスル　ナカニワ　コロンデ　ユキニ　オオキナ
アナオ　アケ　ユキダルマニ　ナっテ　オキアガル　モノモ
アル　センセエワ　ニヒャクメエトルモ　ノボっテ
クダリハジメラレタ　デンコオガタオ　エガク　ミゴトナ
スベリブリニ　ミトレテ　イルト　モオ　メノマエニ
コラレタ　ハゲシイ　セエドオオ　カケテ　キュウテエシオ
ナサル　モオモオト　ユキケムリガ　タツ　ユキケムリガ
キエルト　センセエノ　エガオガ　ウカンデキタ

九十五頁

ソレカラ　ボクタチワ　ナニモ　カモ　ワスレテ　スベっタ」

センゼエワ　ムコオデ　ジャンプオ　シテ　イラレル」

ツバメノ　ヨオニ　クウチュウニ　マイアガっテ

ニジュウメエトルカラ　サンジュウメエトルモ　トバレル

ズガタワ」　イカニモ　ユウソオデ　アル」　ボクタチモ

ヤリタイケレドモ」　マダ　デキナイ」

ビルチカク　ナルト」　ヤマゴヤニ　トマっテ　イル

ヒトビトモ　キテ」　ニギヤカニ　ナっタ」　ジョオズナ　ヒトモ

アルガ」　ナカニワ　コロンデ」　カメノコオ　ヒっクリカエシタ

ヨオニ　バタバタ　シテ　イル　ヒトモ　アっタ」

ユキノ　ウエノ　タノシイ　チュウショクガ　スムト」

コンドワ　センセエニ　ヒトリビトリ　スベリカタオ

オシエテ　イタダイタ」

カエリワ　ムラマデ　クダリキリノ　ユカイナ　ミチダ」

バヤシオ　ヌっテ　チョオキョリオ　スベルノワ　タノシイ

モノダ」　イキニワ　ニジカンアマリモ　カカっタ　ミチオ」

ホンノ　ヒトイキデ　ムラマデ　カエっタ」

〔甲〕

(イ) **發音**　イクカショ、クは母音無聲にいふのが常である。但し「イつカショ」(一箇處)と誤らぬ様注意を要する。

「雪煙」といふ語は平生殆ど使はない。ミズゲムリ、スナゲムリ、シオゲムリ、クロゲムリ等いづれもケと「清音」を使ふので、それに倣つてユキゲムリといふ。「…ゲムリ」と「濁音」を使はない。

(ロ) **アクセント**　ツレテイつテ、別々にはツレテ(平)　イつテ(平)である。多

くは續けて此の型でいふ。ヤア、アクセント不定。エイもアクセント不定。コノヘンデワ、コノヘンは平板式又はコノヘンといふ。從つて「デワ」の附く形は前者をコノヘンデワといひ、後者をコノヘンデワといふ。ニメエトルジカク、チを「清音」にいふ時はニメエトルチカクといふ。ノボリハジメタ、又はノボリハジメタともいふ。ミミモトデ、又はミミモトデ。ミルミル、又はミルミル。モオモオト、又は平板式にもいふ。クウチュウニ、又は平板式にいふ人もある樣である。カメノコ、この語のアクセントは昔から東京語で此の型にきまつてゐる。

〔乙〕

『辻堂の緣に』の次は切らない方がよい。『早いね』の終は一べん上つて直に下る調子。『一米も』を强める。『やあ』『えい』は一々切る方がよい。『兎兎』は「大聲に」とある通り、叫ぶ調子でいふ。『急停止して振返ると』の次は必ず切らなければいけない。振返つて眺めて見る時間を表す。『速い速い』の間は切らない方がよい。『やりたいけれども』の次は切る

方がよい。『ひつくりかへしたやうに』の次は切らない。『二時間餘りも』と『ほんの一息』と相對照するので兩方を强める。

ダイ　ジュウシチ　オオギノ　マト

ヤシマノ　カっセンニ　ゲンジワ　リクニ　ジンオ　トリ
ヘエケワ　ウミニ　フネオ　ウカベテ　アイ　タイセリ
オリシモ　ウツクシク　カザリタル　フネ　イっソオ
ヘエケノ　カタヨリ　コギイダス　ミレバ　ヘサキニ　ナガキ
サオオ　タテ　アカキ　オオギオ　トリツケ　ヒトリノ
カンジョ　ソノ　モトニ　タチテ　リクニ　ムカイテ
サシマネク

九十八頁

ゲンジノ　タイショオ　ヨシツネ　コレオ　ミテ　カノ
オオギオ　イオトス　モノワ　ナキカ　ヒトリノ　ケライ
スミイデ　ナスノ　ヨイチト　モオス　モノアリ　ソラ
トブ　トリモ　サンバニ　ニワワ　カナラズ　イオトスホドノ
ジョオズナリ＞ト　コタエタレバ　ソレ　ヨベトテ　ヨイチオ

九十九頁

メシイダス　ヨイチワ　カタク　ジタイ　シタレドモ
ユルサレズ　ココロノ　ウチニ　オモウヨオ　マンイチ
イソンズル　ナラバ　ユミ　キリオリテ　ジガイ　セント
カクゴオ　キメテ　ンマニ　マタガリ　カイチュウニ
ノリイレタリ
トキニ　カゼ　ツヨク　ナミ　タカケレバ　フネワ

百頁

ユリアゲラレ　ユリサゲラレ　オオギワ　カゼニ　ヒラメキテ
イカナル　ユミノ　メエジンモ　タダ　ヒトヤニテ　イオトス
コトワ　ムツカシト　ミエタリ
ヨイチ　メオ　トジ　イっシンニ　カミニ　イノリテ
フタタビ　メオ　ヒラケバ　カゼ　ヤヤ　シズマリ　オオギモ
スコシク　オチツキテ　イヨゲニ　ミユ　タダチニ　ユミニ
ヤオ　ツガエ　ネライオ　サダメテ　ヒョオト　ハナツ
オオギワ　カナメギワオ　イキラレテ　ソラ　タカク
マイアガリ　ニド　サンド　ヒラヒラト　マワリテ　サっト
カイチュウニ　オチイリタリ
リクニワ　タイショオ　ヨシツネオ　ハジメ　ゲンジノ

百一頁

ツワモノドモ　ンマノ　クラオ　タタキテ　ヨロコビタリ』
ウミニワ　ヘエケノ　グンゼエ　フナバタオ　タタキテ
ドット　ホメアゲタリ』

〔甲〕

(イ) 發音　イオトスホドノ、スに母音無聲化を起すことが多いが、有聲にいつた方が一層はつきりする。ムツカシト、日常の口語ではムズカシイとズを「濁音」にいふが、此處はツの「清音」を使つてある。從つて次にカ音が來るためツに母音無聲化を起す。

(ロ) アクセント　モノアリ、別々にはモノ　アリであるが、多くは續けて此の型でいふ。ジタイ、又はジタイ。オモウヨオ、別々にはオモウ　ヨオである。

〔乙〕

イオトス　コトワ、又は續けてイオトスコトワ。ムツカシト、又はムツカシト。イつシンニ、又はイつシンニ。サつト、アクセント不定。

義經の言葉の終『射落す者は無きか』の次はやゝ長く切つてよい。『それ呼べ』の次は切らない方がよい。『自害せんと』の次もやゝ長く切る。『思ふ樣』は此處までだからである。『いかなる弓の名人も』の次は切らない方がよい。『餘一目を閉ぢ』からは稍ゆつくりいふ。『射よげに見ゆ』の次は殆ど切らない位にいふ。『直ちに』からは稍急にいふ。『矢をつがへ』の次は切らない。上記本文には『舞上り』の次で切り、『まはりて』の次は切らない樣に表記した。それは「二度三度まはり」つゝ落ちる有樣と解釋したからである。もし『舞上り』の次を切らず、『まはりて』の次で切れば「舞上つて後空高い處でひら〳〵とまはつた」有樣を表すことになる。こゝは解釋次第でいづれにもなる。

ダイ　ジュウハチ』　ユミナガシ』

ヨシツネ　ンマオ　カイチュウニ　ノリイレテ　ハゲシク
タタコオ　オリシモ　イカナル　ハズミニカ　ワキニ　ハサミ

イタル　ユミオ　カイチュウニ　トリオトシタリ』
ヨシツネワ　バジョオニ　ウツブシ　ムチノ　サキニテ
ナガレユク　ユミオ　カキヨセ　トラント　スレバ　テキワ
センチュウヨリ　クマデオ　モっテ　ヨシツネノ　カブトニ

百二頁

ウチカケ　ウチカケ　ヒキタオサントス』
ゲンジノ　ツワモノドモ　ソノ　ユミ　ステタマエ
ステタマエ＞ト　クチグチニ　ユウ』
サレドモ　ヨシツネワ　タチニテ　クマデオ　フセギ　フセギ
ツイニ　ユミオ　ヒロイアゲテ　リクニ　ノボル』ケライノ
モノ』　タトエ　キンギンニテ　ツクリタル　ユミナリトモ
オンイノチニワ　カエガタシ＞ト　モオセバ　ヨシツネ

百三頁

ワライテ　ユミオ　オシミタルニ　アラズ』　オジ　タメトモノ
ユミノ　ヨオナラバ　ワザト　オトシテモ　アトオベシ』
ヨワキ　ユミオ　トラレテ　コレガ　ヨシツネノ　ユミナリト
アザケラルルワ　ゲンジ　イチモンノ　ハジナラズヤ＞ト
イエリ』　ゲンジノ　ツワモノドモ　コレオ　キキテ　マコトノ
タイショオカナト　ミナ　カンジアエリ』

百四頁

〔甲〕(イ) 發音　『戰ふ』は文語文中であるからタタコオといふ。
(ロ) アクセント　ハサミ　イタル、又は續けてハサミイタル。バジョオニ、又はバジョオニ。オンイノチニワ、又はオン　イノチニワ。アトオベシ、又はアトオベシ。カンジアエリ、又はカンジアエリ。

〔乙〕『敵は船中より』の邊の切り方、上記本文表記の様に切るのがよいであらう。兵の言葉『其の弓』は強めない、『捨て給へ』を強める。『金銀にて』

を強める。『わざと』を強める。『これが義經の弓なり』の次は切らない方がよい。『大將かな』の次も切らない方がよい。

百五頁

ダイ ジュウク』 モノノ ネダン』

ムカシ オニガ モっテ イタト ユウ ウチデノ コズチオ
モシ ニンゲンノ セカイエ モっテキタト スレバ
ドオデショオ』 キっト ナンオクエン ナンジュウオクエント
ユウ タカイ ネダンノ モノニ ナルニ チガイ
アリマセン』 ナゼカト イエバ ウチデノ コズチワ ソレデ
ナンデモ ホシイ モノガ ウチダセルト ユウ コトデス』
コオ ユウ チョオホオナ モノワ ダレ ヒトリ

百六頁

ホシガラナイ モノワ アリマセン』 ソノ ウエ ウチデノ
コズチワ オハナシニ キク ダケデ ワレワレノ テニ
ハイラナイ ヒジョオニ メズラシイ モノダカラデス』
トコロデ コノ ウチデノ コズチカラ オナジ ウチデノ
コズチオ イクツモ イクツモ ウチダシタラ ドオデショオ』
ソオシテ セカイジュウノ ヒトガ ミナ テニ イレタラ
ドオデショオ』 モオ メズラシクモ ナントモ アリマセン』
メエメエノ モっテ イル ウチデノ コズチカラ
アタラシイノガ イクツデモ ウチダセマス』 コオ ナルト
ウチデノ コズチワ マルデ ネダンノ ナイ モノニ
ナっテ シマウカモ シレマセン』

百七頁

コレワ　タトエバナシデスガ　シカシ　コレト　オナジヨオナ
コトガ　ワレワレノ　セエカツニ　オイテモ
カンガエラレマス
ダイヤモンドワ　ホオセキノ　ナカデモ　イチバン　カタクテ
コオタクノ　ウツクシイ　モノデスカラ　ダレデモ
ホシガリマス　ケレドモ　ダイヤモンドワ　ワズカシカ
デマセンカラ　ミナガ　テニ　イレルト　ユウ　コトワ
デキマセン　ダカラ　ダイヤモンドワ　マメツブグライノ
オオキサノ　モノデモ　ナンゼンエン　ナンマンエント　ユウ
タカイ　ネダンデス
ワレワレワ　クウキオ　コキュウシテ　イキテ　イマス

百八頁

ダイヤモンドワ　ナクテモ　サシツカエ　アリマセンガ　モシ
クウキガ　ナカっタラ　ワレワレワ　イつコクモ　イキテ
イラレマセン　クウキワ　コレホド　タイセツナ　モノデスガ
シカシ　ワレワレノ　スンデ　イル　トコロニワ　ドコニデモ
アリマス　ダカラ　クウキニワ　ネダンガ　ナイノデス
チョオド　セカイジュウノ　ヒトガ　ミナ　ウチデノ
コズチオ　モっテ　イル　ヨオナ　モノデス
コオ　カンガエルト　モノニ　ネダンガ　アルノワ
ヒトツニワ　ワレワレガ　ソノ　モノオ　ホシガルト　ユウ
コトト　イマ　ヒトツニワ　ソノ　モノガ　エガタイト　ユウ
コトガ　ゲンインニ　ナっテ　イル　コトガ　ワカリマス

百九頁

百十頁

トコロデ　オナジ　シナモノデモ　トキニ　ネダンガ　タカク
ナっタリ　ヤスク　ナっタリ　シマス　ソレワ　ドオユウ
ワケデショオカ
セリイチエ　イっテ　ミルト　ショオニンガ　サア　イクラ
サア　イクラト　イイナガラ　オオゼエノ　ヒトニ
シナモノオ　ミセテ　イマス　スルト　オオゼエノ　ナカカラ
ジュウゴセン　ジュウナナセン　ニジっセン>ナドト　ユウ
コエガ　オコリマス　モオ　ソレ　イジョオ　タカイ
ネダンオ　ツケル　ヒトガ　ナイト　ソノ　シナモノワ
ニジっセント　イっタ　ヒトノ　テニ　ハイリマス　ツマリ
ソノ　シナモノワ　イチバン　タカイ　ネダンオ　ツケタ

百十一頁

ヒトニ　ウラレル　コトニ　ナルノデス
マタ　コレト　ハンタイノ　コトガ　アリマス　オナジヨオナ
シナモノオ　ウル　ミセガ　オオク　ナランデ　イルト
シマス　シナモノオ　カオオト　オモウ　ヒトワ　タイテエ
アっチコっチト　ミセオ　タズネテ　ネダンオ　トイアワセ
イチバン　ヤスク　ウル　ミセデ　カイマス
コノ　フタツノ　バアイカラ　コオ　ユウ　コトガ
カンガエラレマス　シナモノガ　スクナクテ　カウ　ヒトガ
オオイ　トキニワ　シナモノノ　ネダンワ　タカク　ナリマス
ハンタイニ　シナモノガ　オオクテ　カウ　ヒトガ　スクナイ
バアイニワ　シナモノノ　ネダンワ　ヤスク　ナリマス

百十二頁

チョオド　ウチデノ　コズチガ　タダ　ヒトツシカ　ナケレバ
ナンオクエント　ユウ　タカイ　ネダンデショオガ
セカイジュウノ　ヒトガ　ミナ　モテバ　ネダンガ
ナクナッテ　シマウト　ユウノト　オナジ　コトデス『』
コオ　ユウ　フウニ　モノノ　ネダンワ　シュトシテ　モノオ
カウ　ホオ　スナワチ　ジュヨオト　モノオ　ウル　ホオ
スナワチ　キョオキュウトノ　カンケエニ　ヨっテ　タカクモ
ナレバ　ヤスクモ　ナルノデス』

〔甲〕

(イ) 發音　『めい〳〵』はメエメエといふのが自然の言葉の慣用である。サシツカエ、シにも母音無聲化を起し易いが、有聲にいふ方がよい。

(ロ) アクセント　イクツデモ、又はイクツデモ、殊にデモを強める場合は後者の様にいふ。ユウコトワ、又は續けてユウコトワ。ドコニデモ、又はドコニデモともいふ。デモを強める場合はドコニデモといふ。ジュウナナセン、もし「七」をシチといふ時はジュウシチセンといふ。カオオト、又はカオオト。オナジコトデス、又は續けてオナジコトデス。

〔乙〕

『幾つでも』(百六頁六行)を強める。『ねだんのない』の「ない」を強める。『一刻も』を強める。『ほしがる』(百九頁一行)『得がたい』(同二行)を強める。『さあいくら』通例「さあ」の方を強くいふ様である。百十一頁『此の二つの場合から』の中で『高くなります』『安くなります』と○○の處を強める。相對照するからである。『需要』『供給』の二語を強める。

百十三頁

ダイ　ニジュウ『　ヒロセ　チュウサ』
トドロク　ツツオト　トビクル　ダンガン『　アラナミ　アロオ

デ|っキノ　ウエ|ニ　ヤミ|オ　ツラ|ヌク　チュウサノ　サケ|ビ||

百十四頁

ス|ギノワ　イズコ||　ス|ギノワ　イズ|ヤ||

セ|ンナイ　ク|マナク　タズ|ヌル　ミ|タビ|　ヨ|ベド　コタ|エズ|

サガ|セド　ミ|エズ||　フ|ネワ　シダイニ　ナミ|マニ　シズミ|

百十五頁

テキダン　イ|ヨイヨ　ア|タリニ　シ|ゲシ||

イ|マワト　ボ|オトニ　ウツ|レル　チュウサ|　トビ|クル　タマ|ニ

タチマチ　ウ|セテ|　リ|ジュン　コオガイ　ウラ|ミゾ　フカ|キ|

グンシン　ヒ|ロセト　ソノナ　ノコ|レド||

〔甲〕

(イ) 發音　『洗ふ』はアラウといはず、アロオといふ。

(ロ) アクセント　サケ|ビ、又はサケ|ビ、殊に「てにをは」の附く時サケ|ビオ、サケ|ビ|ガ等といふことがある。ナミ|マニ、又はナミ|マニといふ人もある。

百十六頁

〔乙〕

ボ|オト、此の型の方が原語(英語 boat)に近い。又平板式にもいふ。此の課は全體として強い聲でいふのが適當である。速度はやゝ遲くてよい。『忽ち失せて』の次はやゝ長く切つてよい。

ダ|イ　ニ|ジュウ　イ|チ||　ホノ|ルルノ　イチニチ||

アメリカイキノ　フ|ネワ||　ヨコハマオ　デ|テ　ヨオカメニ

ハ|ワイノ　ホノ|ルルニ　キコオスル||　コノ　アイダ　タ|ダ

ミズト　ソ|ラバカリ　ナガ|メテ　イタ　ミニ|ワ|　トオジョオノ

コノ　ウツ|クシイ　ト|シガ　マコトニ　ナツ|カシイ　モノ|ニ

オモワ|レル||　ミズギワ　チカ|ク　ソビエタツ　ト|オオ

ノゾ|ミナ|ガラ|　フ|ネガ　ガンペキニ　チカ|ズ|ク|ト|　ソコ|ニワ

モオ　ギっシリト　デムカエノ　ヒトビトガ　ツメカケテ
イル＝　メエメエ　クビニ　カケタ　ハナノ　クビカザリガ
メダっテ　ウツクシク　ミエル＝　モト　ドジンガ　シンアイノ
ジョオオ　アラワス　シルシデ　アっタノガ　イマデワ
ハワイ　イっバンノ　フウシュウニ　ナっタノダ　ソオデ
アル＝　ドコカデ　バンザイノ　コエガ　オコル＝　アメリカ
ガっシュウコクノ　リョオドダト　ユウノニ　ヨコハマデ
オクラレタ　トキト　オナジ　ニっポンゴノ　カンセエガ
ココデモ　キカレル＝　デムカエノ　タイハンワ
ニっポンジンデ　アル＝　ナカニワ　ニっポンノ　キモノオ
キテ　オビオ　キチント　ムスンダ　オンナノ　スガタサエ

百十七頁

百十八頁

マジっテ　イル＝
ニっポンリョカンエ　アンナイサレ　フロオ　アビテ
ユカタニ　キカエルト　イっタイ　ココガ　ドオシテ
ガイコクカト　イイタク　ナル＝　ザシキニ　スワっテ　チャオ
ノム＝　ソバニワ　ハワイノ　ニっポンジンブンサエ　オイテ
アル＝
キケバ　ソレモ　ソノ　ハズ　ハワイノ　ジンコオ　ヤク
サンジュウ　ハチマンノ　ウチ　ヤク　ジュウゴマンガ
ニっポンジンデ　ソレガ　ノオギョオ　ギョギョオ
ショオギョオオ　ハジメ　アラユル　ショクギョオニ
ジュウジシテ　イルノダ＝　ハワイガ　コンニチノ　ヨオニ

百十九頁

ハっタツシタノモ　ホトンド　ニっポンジンノ
チカラダト　イっテ　ヨイト　イワレテ　イル＝　コノ
リョカンデ　ダシテ　クレル　サシミワ　タブン
ニっポンジンノ　トっタ　ウオデ　アロオ＝　コトニヨルト
ゴハンニ　シテモ　ヤサイニ　シテモ　コオヒイニ　シテモ
サトオニ　シテモ　バインアっプル　ソノタノ　クダモノニ
シテモ　ミンナ　ニっポンジンノ　テデ　ツクラレタ　モノガ
ツカワレテ　イルノカモ　シレナイ＝
ホノルルワ　ホントオニ　ウツクシイ　トシデ　アル＝　イタル
トコロニ　ヤシノ　コダチガ　アル　ナミキガ　ツズク＝
サっパリシタ　タテモノノ　イロト　ネっタイショクブツノ

百二十頁

コイ　ミドリガ　エエジアウ＝　コトニ　ウツクシイノワ
ハワイノ　ハナト　イワレル　ハイビスカスノ　ハナデ　アル＝
イエイエノ　カキネト　イワズ　コオエンノ　ナミキミチト
イワズ　キニ　アカニ　シロニ　サキホコリ　サキツズイテ
イルノオ　ミルト　マルデ　オトギノ　クニニデモ
サマヨっテ　イル　ヨオナ　キガ　スル＝
ハワイワ　ジツニ　アカルイ　トコロデ　アル＝　ドコマデモ
アオク　スミキっタ　オオゾラノ　モトニワ　チジョオノ
アラユル　モノガ　イロ　アザヤカニ　ミエル＝　ナカデモ
キレエナノワ　ウミノ　イロダ＝　チョオド　マっシロナ
ギュウニュウニ　ミドリノ　エノグデモ　ナガシコンダ

百二十一頁

ヨオデ　アル〔一〕

ハワイワ　ユウヒ　ナキ　シマト　イワレテ　イル〔二〕　ヒガ

ニシニ　カタムイテモ　ニっポンナラバ　マダマダト

オモワレル　ジブン　ココデワ　アっト　ユウ　マニ　ヒガ

オチテ　シマウカラデ　アル〔三〕　ソオシテ　ソノ　コロカラ

クモノ　イロドリガ　ナントモ　イエヌ　ウツクシサオ

ミセル〔四〕

ヨルニ　ナルト　オオゾラニ　ホシガ　イっパイ

テリカガヤク〔五〕　ホシ　ヒクキ　クニト　ユウノモ　ハワイノ

コトデ　アル〔六〕　ホシノ　ヒトツヒトツガ　オオキク　ミエル

バカリカ　ワレワレガ　フツウ　ホシガタト　イっテ　イル

カタチノ　トオリニ　ミエル〔一〕

ハワイニワ　シナジンモ　セエヨオジンモ　イルガ

ワレワレニ　メズラシイノワ　イロノ　アカグロイ　セ(エ)ノ

タカイ　ドジンデ　アル〔二〕　カラダガ　オオキイノニ

セエシツガ　ゴク　オトナシク　シカモ　オンガクガ

ダイスキデ　アル〔三〕　ユウメエナ　ワイキキノ　カイガンワ

コンニチ　ブンメエオ　ホコル　コオエンチタイト　ナリ

カイスイヨクジョオト　ナっテ　イルガ　ソレデモ　ツキノ

アカルイ　バンナドワ　ドジンノ　ムレガ　ヤシノ　コカゲデ

アワレっポイ　ウタニ　アワセテ　イチヤオ　オドリアカス

ソオデ　アル〔四〕

百二十四頁

ヨル　リョカンノ　シンダイニ　ヨコタワリナガラ、
ドコカラカ　キコエテ　クル　シナジンノ　コエヤ　ドジンノ
ウタニ　ミミオ　カタムケテ　イルト　ヤハリ　ココワ
ガイコクダト　ユウ　コトオ　シミジミト　カンズル』

〔甲〕

(イ) 發音　『アメリカ行』日常の言語でも「ユキ」といふことが多いが、此處は「イキ」と讀むことになつてゐる。バインアつプル、バイナつプルといふ方が原語(英語 pineapple)に近い。ウツクシサ、シに母音無聲化を起すことが多いが、成るべく有聲にいふ方がはつきりする。セノタカイといふことは日常の言語で決して言はない。必ずセエノタカイである。背をセエとよんでよい筈である。「何」をナニ、ナンとよむのと同じ理由である。ワイキキ、キを二つとも母音を有聲にいふのが原語に近い音となる。

(ロ) アクセント　ホノルル、又は平板式にもいふ。原語のアクセントに近くいへばホノルルであらうが、此の型は東京語に無いから採用することが出來ない。ハワイ、又は平板式。これも原語に近くいへばハワイイである。ソビエタッ、又はソビエタッ。カンセエ『歡聲』、アクセント不確。カンセエ又は平板式のいづれかである。フロオ『風呂を』、又はフロオといふ人もある。ギョギョオ『漁業』、又はギョギョオ。農業、商業も始めの「ノ」「ショ」の音節を高くいふ人がある。ソノタノ、又はソノタノ。イタル　トコロニ、又は續けてイタルトコロニ。コダチ、又は平板式。ハイビスカス、これが原語(Hibiscus)のアクセントに近い。サキッズイテ、又はサキッズイテ。マダマダ、又は別々にマダ　マダといつてもよい。アつト、アクセント不定。ヒトツヒトツガ、これをヒトツビトツガといふ時は此の型でいふ。セエノタカイ、又はセエノタカイ。ワイキキ、原語(Waikiki)に近くいへばワイキキであらう。

〔乙〕

『目立つて』を強める。『同じ』『日本語』『こゝでも』を強める。『どうして』(百十八頁五行)を強める。『土人』(百二十二頁末行)を強めることを忘れては

ならない。『やはり』(百二十四頁二行)を強める。

ダイ　ニジュウ　ニ　コロンブスノ　タマゴ

コロンブスガ　アメリカオ　ハっケンシテ　カエっタ　トキ
イスパニヤジンノ　ヨロコンダ　コトワ　ヒジョオナ
モノデシタ
イチジツ　シュクガカイノ　セキジョオデ　ヒトビトガ
カワルガワル　タっテ　コロンブスノ　セエコオオ
シュクシマスト　ヒトリノ　オトコガ　タイヨオオ　ニシエ
ニシエト　コオカイシテ　リクチニ　デアっタノガ
ソレホドノ　テガラダっタロオカ>ト　イっテ

百二十五頁

レエショオシマシタ
コレオ　キイタ　コロンブスワ　ツト　タっテ　ショクタクノ
ウエノ　ユデタマゴオ　トリ　ショクン　ココロミニ　コノ
タマゴオ　タクジョオニ　タテテ　ゴランナサイ>ト
イイマシタ　ヒトビトワ　ナンノ　タメニ　コンナ　コトオ
イイダシタカト　オモイナガラ　ヤっテ　ミマシタガ
モトヨリ　タトオ　ハズワ　ゴザイマセン
コノトキ　コロンブスワ　コツント　タマゴノ　ハシオ
ショクタクニ　ウチツケ　ナンノ　クモ　ナク　タテテ
モオシマシタ　ショクン　コレモ　ヒトノ　シタ　アトデワ
ナンノ　ゾオサモ　ナイ　コトデ　ゴザイマショオ

百二十六頁

〔甲〕(イ) 發音　『ゆで卵』通常の言語ではウデタマゴといふ方が普通である。

(ロ) アクセント　タマゴ、又は平板式。『大洋』アクセント不確。タイヨオ、又はタイヨオ。コオカイ、又はコオカイ。コンナ　コトオ、又は續けてコンナコトオ。ナンノ　クモ　ナク、又は續けてナンノクモ　ナク。

〔乙〕『それ程の』を強める。『手がらだつたらうか』の終は尻下りの調子。コロンブスの言葉の中『立てて』を強める。『卓上に』を強めては良くない。『思ひながら』の次で切らず、『やつてみましたが』の次で切る方がよい。コロンブスの最後の言葉『これも』と『人のした後』とを兩方を強めなければならない。それには『これも』の次で切る方がよい。又『人のした後』をやゝゆつくりいふと良い。

百二十七頁

ダイ　ニジュウ　サン』　ギョソン』

イチ』　フネガ　デル』

カン』　カン』　カン』　カン』

スミキッタ　アサノ　クウキオ　フルワセテ』　バンギガ

ナリヒビク』

フネガ　デルゾオ』

オオイ』

オオゴエデ　ヨビカワシ』　オトコモ　オンナモ』　ハダシデ

ハマエ　オリテ　イク』　アタリワ　マダ　ウスグライ』

クログロト　オオキナ　カラダオ　ヨコタエテ　イル　フネノ

カゲデ』　イクカショニモ　タキビガ　ハジメラレル』　ヤつサ

ヤつサ』

イサマシイ　カケゴエデ　フネワ　タチマチ　ウミエ

百二十八頁

ヒキオロサレル　ミズニ　ウク　キカイガ　カカル

ドドドオット　イソニ　クダケル　ナミガ　フネオ　リクエ

オシアゲヨオト　スル　サオハリガ　マンシンノ　チカラオ

百二十九頁

コメテ　サオオ　ツバル

ニバンセオ　コスト　オリカラ　ノボル　タイヨオノ

ヒカリオ　アビテ　ナガク　アトオ　ヒキナガラ

イッチョクセンニ　オキエ　ミルミル　ソノ　カゲワ

チイサク　ナッテ　イク

ニ　タイリョオ

ボクラワ　ハシケニ　ノッテ　グングン　オキエ　デタ

キョオワ　スバラシイ　ナギダ　ボクワ　ブンジト　ヘサキニ

スワッテ　フネガ　アガルト　カラダオ　ウカス　ヨオニ

百三十頁

ウネガ　サガルト　カラダオ　シズメル　ヨオニ　シテイタ

ニイサン　ハマヤノ　フネダヨ

ブンジガ　ユビサシタノデ　ミルト　フネガ　イッソオ

ハシッテ　イル　ヤゴオオ　ソメヌイタ　コバタモ　ミエル

コドモガ　ヒトリ　フネノ　マンナカニ　イル

アレワ　キット　ハマヤノ　ゲンジクンダヨ　ゲンジクン

ゲンジクン　オオゴエニ　ヨビナガラ　ブンジガ

タチアガリカケルト　トモニ　イタ　フナカタガ

百三十一頁

アブナイ　ト　ドナッタ

ウシロオ　フリカエルト　モオ　ヤジマノ　ミサキモ

ミエナイ メノ トドク カギリワ キモノデモ ソマル
ヨオナ マっサオナ ミズダ
ヤガテ アミバエ キタ ナンジっソオト ユウ フネガ
イマ オモイオモイニ アミオ ハっテ イル トコロダ
シラナミオ タテナガラ ウオオ サオオシテ マルデ
センジョオノ ヨオデ アル ボクラノ アミブネワ モオ
アミオ タグリハジメタ
サア ノオ>ト ヒトリガ オンドオ トルト オオゼエノ
フナカタガ ミンナ コレニ アワセテ ヤっサ ヤっサ>ト
アミオ タグル ダレモ カレモ シャクドオイロノ
ハダカラ タマノ アセオ ナガシテ イル

アミガ ツボマっテ キタ トコロデ アミブネワ ボクラノ
ノっテ イル フネオ ヨンダ
アミブネ ニソオノ アイダエ マっスグニ ノリイレル
オオキナ タモデ アミカラ イワシオ ドンドン ボクラノ
フネエ アゲル ミルミル フネノ ナカニワ イワシノ
ヤマガ キズカレル イワシノ オモミデ フネガ グっト
カタムク ホドダ
ボクラノ フネワ サユウノ アミブネカラ サオデ
オサレナガラ アミノ ソトエ デル デルト キカイオ
イっパイニ カケテ イエジエ イソイダ
イツノマニ タテタノカ ヘサキニワ タイリョオオ

シラセル　シンクノ　フキナガシガ　ニホン　イセエヨク
カゼニ　ヒルガエっテ　イタ』

〔甲〕

(イ) 發音　『幾箇所』前出、原讀本九十三頁二行、本書九九頁參照。『右往左往』の「左」はザと「濁音」にいつても良い。

(ロ) アクセント　カンカン…、アクセント不定。ヤつサ、アクセント不定。ドドドオも不定。ハシケニ、又はハシケニ。シテイタ、多くは續けて此の型でいふ。別々にはシテ(平)　イタ(平)である。ハシつテ、本書三四頁參照。トモニ、又はドモニともいふ。ウオオ　サオオ、又はウオオ、サオオといふ人もある。オンド、又平板式にいふ人もある。

〔乙〕

カンカン…といふ板木の音はあまり續け樣に速くいつては良くない。『船が出るぞう』等の呼聲はやゝ大きい聲で呼ぶ樣にいふ。『男も女も』の次で切り、『はだしで』の次は切らない方がよい。ヤつサ、アクセント不定であるが、ヤに力を入れていふのがよい。「ドドドオ」の間は切らず

に速くいひ、終の「ドオ」をやゝ長く延ばしていふと良い。『どうつと』のとの前は切らない。『濱屋の船だよ』の終は尻上りの調子でいふ。『船が一さう』の『船』の方を強める。『一さう』を強めてはよくない。『子供が一人』も同樣『子供』の方を強める。『源治君だよ』の終も尻上りの調子。『源治君』と呼ぶ聲の「クーン」と延ばしても良い。『あぶない』は大きな聲で而も速くいふ。『戰場』を強める。『さあのう』は呼ぶ樣にやゝ強くいふ。『玉の汗』を強める。

ダイ　ニジュウ　シ　スイゾっカン

キノオ　オトオサント　イっショニ　スイゾっカンエ
イキマシタ』
イリクチノ　ソバニ　イケガ　アっテ　ソコニ　コオノ

百三十五頁

ナガサガ　イチメエトルモ　アル　ウミガメガ　イルノニワ
ビっクリ　シマシタ
ナカエ　ハイっテ　マズ　メニ　ツイタノワ　シツノ
マドギワニ　イクツモ　ナラベテ　アル　ガラスノ
ハコデシタ　キレエナ　カイスイガ　コマカイ　アワオ
タテナガラ　ドノ　ハコニモ　ソソイデ　イマス　ソオシテ
アカヤ　キヤ　ミドリノ　ナントモ　イエナイホド
ウツクシイ　モノガ　ハイっテ　イマシタ

百三十六頁

ソレワ　ミンナ　ウミニ　イル　ドオブツデシタ
ミドリイロノ　スキトオル　ヨオナ　ショクシュガ　キクノ
ハナノ　ヨオニ　ウツクシイ　イソギンチャクダノ　ヒノキノ

百三十七頁

ハノ　ヨオデ　キイロヤ　エビチャイロオ　シテ　イル
イソバナダノ　チョオド　チイサイ　キンセンカガ　ムラガリ
サイタ　ヨオナ　イボヤギダノ　ホシガタデ　アカヤ
アオイロオ　シテ　イル　ヒトデダノ　ドレモ　コレモ　メノ
サメル　ホド　ウツクシイ　モノ　バカリデシタ
タツノオトシゴモ　イマシタ　オオ　ナニカニ　キリキリト
マキツケテ　アノ　ンマノ　ヨオナ　カオオ
ウツムキカゲンニ　コっクリ　コっクリ　ウゴカシテ　イマス
コレガ　モシ　メオ　ツブっテ　イタラ　イネムリオ　シテ
イルト　イイタイ　トコロデスガ　マルイ　メオ　ミハっテ
イルノデスカラ　ドオシテモ　ナニカ　ヒドク

百三十八頁

カンガエコンデ　イルトシカ　オモワレマセン
イっタイ　ナニオ　アンナニ　カンガエテ　イルノカ
ナア＞ト　ヒトリゴトオ　イっタノデ　オトオサンガ
オワライニ　ナリマシタ
クラゲモ　イマシタ　スキトオっタ　カンテンノ　ヨオナ
カラダカラ　ウデガ　イクホンモ　デテ　イマス　トキドキ
カラダオ　シボル　ヨオニ　シテ　スイスイト
ウキアガリマス
アアユウ　フウニ　カラダオ　シボルト　ナカノ　ミズガ
イキオイヨク　シタエ　デル　ソノ　イキオイデ　クラゲワ
ウンドオスルノダ＞ト　オトオサンワ　オっシャイマシタ

百三十九頁

コノ　シツノ　チュウオオニ　チョっケエ
シゴメエトルグライノ　マルイ　イケガ　アっテ　ナカニ
タクサンノ　イワシガ　オヨイデ　イマシタ　ヤク
ニセンビキワ　イルダロオト　ユウ　コトデシタ　コノ
タクサンノ　イワシガ　イケノ　フチニ　ソオテ　ミンナ
オナジ　ホオコオニ　オヨイデ　イマス　イっピキトシテ
ハンタイノ　ホオコオエ　ススムノワ　アリマセン　ミンナ
オナジ　ホオエ　ムカっテ　オヨイデ　イマスネ
ソオダ　ソオシテ　ヨク　ミナサイ　ソトガワオ　マワっテ
イル　モノモ　ウチガワオ　マワっテ　イル　モノモ　ソロっテ
ドオジニ　ススンデ　イルダロオ　ツマリ　ソトガワニ　イル

百四十頁

モノワ　オオイソギデ　ススンデ　イル＝　ウチガワニ　イル
モノワ　ユっクリト　ウゴイテ　イル＝　ソレデ　チョオド
ウチガワモ　ソトガワモ　ソロっテ　ススメルノダ＝
ツギノ　△シツニワ　ガラスオ　ハっタ　オオキナ　マドノ
ヨオナ　モノガ　ジュンジュンニ　ナランデイテ　ソノ
ガラスゴシニ　シュジュノ　ウオノ　オヨイデ　イルノガ
ミラレマ△シタ＝　タイモ　イマ△シタ＝　イサキモ　イマ△シタ＝　アジ
タコ　ソノホカ　ナマエオ　ハジメテ　△キク　ウオモ
タクサン　イマ△シタ＝
タイワ　ナント　イっテモ　ドオドオタル　ウオデス
ゴロクジっセンチメエトルモ　アルノガ　ユウユウト

百四十一頁

オヨイデ　ホカノ　ウオナドワ　ガンチュウニ　ナイト
イっタ　フウオ　△シテ　イマス＝　コオセンノ　グアイデ
セナカノ　アタリガ　テンテント　ソライロニ　△ヒカルノワ
ホントオニ　キレエデ△シタ＝
アジワ　スイチュウニ　イルト　ジツニ　キノキイタ
ウオデス＝　ムナビレオ　△スっト　サユウニ　ハリ　セビレ
ハラビレオ　ジョオゲニ　ハっテ　ススム　スガタワ　アノ
サカナヤノ　ミセサキデ　ミルノトワ　マっタク　チガっタ
カンジデス　ケエカイナ　グンヨオ△ヒコオ△キト　イっタ
カっコオデス＝
ソレト　ニテ　△スコシ　ヨオスノ　チガウノガ　ホオボオデス＝

百四十二頁

百四十三頁

タカイ　トコロカラ　ヒクイ　トコロエ　オリル　トキ　ソノ
ムナビレワ　オオギノ　ヨオニ　ヒロガリマス　ソオシテ
チョオド　ヒコオキガ　クウチュウオ　カっソオスル　ヨオニ
テギワヨク　ミズオ　キっテ　オリテ　キマス　シタエ
オリルト　ムネノ　トコロニ　アシノ　ヨオナ　モノガ

百四十四頁

アっテ　ソレデ　ノコノコ　アルクカラ　フシギデス
カレエワ　ヒラタイ　カラダオ　クネラセテ　オヨギマス
ホカノ　ウオワ　ハラオ　シタニ　セオ　ウエニ　シテ
オヨギマスガ　カレエワ　イッデモ　カラダオ　ヨコニ　シタ
ママ　クネっテ　イキマス　オモシロイノワ　カレエガ
スナノ　ナカニ　モグっテ　イル　ヨオスデス　ソノ

ヒラタイ　カラダニ　チョっト　スナオ　カブルト　ウエカラ
ミテモ　ドコニ　イルノカ　ケントオガ　ツキマセン
ヨクヨク　ミルト　フタツノ　メダケオ　スナノ　アイダカラ

百四十五頁

ダシテ　キョロリ　キョロリト　メダマオ　ウゴカシナガラ
ソトオ　ナガメテ　イマス　チョオド　センスイカンガ
スイチュウニ　モグっテ　センボオキョオダケオ　ダシテ
イル　カっコオデス
タコワ　スバラシイ　カツドオオ　シマス　イワヤ　スナノ
ウエオ　アルク　トキワ　ハチホンノ　ナガイ　アシオ
タクミニ　クネラセ　アタマオ　ヨコニ　カタムケナガラ
ススミマス　オトオサンノ　セツメエニ　ヨルト　タコト

百四十六頁

ユウ モノワ ジツニ ミョオナ モノデ アノ フツウニ
アタマト イっテ イル トコロガ ジツワ ドオデ
ドオカラ アシガ デナイデ アタマカラ アシガ デテ
イルノダ ソオデス
ダカラ アルク トキ アア ユウ フウニ アタマガ
カタムイテ ヘンナ カっコオニ ミエルガ アレワ
ドオナノダカラ ベツニ フシギワ ナイノダヨ
ソノ ウチニ タコガ オヨギハジメマシタ ハチホンノ
アシオ ヒトツニ ソロエ ドオオ セントオニ マルデ
ヤノ ヨオニ ススミマス コレガ イカダト モっト
スバラシイ ソオデス

百四十七頁

タカアシガニト ユウ オオキナ カニガ イマシタ
サユウノ アシオ イっパイニ ノバシタラ
サンメエトルグライワ アルデショオ アシガ ナガイ
ワリアイニ コオワ チイサイノデスガ オモシロイノワ
ソノ クチノ トコロデス クチニワ イロイロ コミイっタ
ドオグガ ツイテ イマスガ ソノ ウエノ トコロニ
チイサイ ショっカクガ アっテ ソレガ チョオド
オニンギョオサンノ カワイラシイ リョオテオ
オモワセマス シカモ ソノ リョオテワ ピヤノデモ ヒク
ヨオニ シジュウ カッドオシテ イマス
カニワ オンガっカデスネ> ト ワタクシガ イっタノデ

百四十八頁

オトオサンモ　ソバニ　イタ　ヨソノ　ヒトタチモ　ミンナ
イチドニ　フキダシマシタ』

〔甲〕

(イ) **發音**『平たい』(百四十四頁二行)、日常の言語ではヒラつタイといふのが常である。此處はヒラタイといはせることになつてゐる。

(ロ) **アクセント**　ガラスノ、又はガラスノ。ソソイデ、又は平板式にいふ人も無いではない。『いそばな』『いぼやぎ』アクセント不確、今平板式を採る。『…ダノ』が附いて、イソバナダノ、イボヤギダノといふ。ヒトデは必ず平板式に固定してゐる。ドレモ　コレモ、又はドレモ　コレモといふ人があるが、上記コレモを平板式にいふ方が普通である。コつクリ、又はコつクリといつてもよい。ヒトリゴトオ、又はヒトリゴトオ。ユウ　コトデシタ(百三十九頁三—四行)、又は續けてユウコトデシタ。ソオテ『沿うて』、又はソオテともいふ。ドオドオタル、又はドオドオタル。ホオボオ(魚名)、平板式にいふ。「デス」が附くのでホオボオ

デスといふ。テギワョク、多く續けて此の型でいふ。別々にはテギワ(テギワガ等)ョクである。キョロリ　キョロリト、又はキョロリキョロリト。

〔乙〕

『水族館へ』を稍強める。『いそぎんちゃく』『いそばな』等の名を一々強めていふべきである。『一體何を』の『何』を強める。『…なあ』を「ナ」を高く「ナア」と尻下りの調子でいふ。『一匹として』を強める。『同時に進んで居るだらう』の終は尻上りの調子。『大急ぎ』『ゆつくり』を強める。『少し様子の違ふ』の『少し』を強める。『不思議です』よりも其の前の『のこ〳〵歩く』の方を強める方がよい。又特に『歩く』を強めるとよい。『おもしろいのは』と『砂の中にもぐつて』を強める『實は胴で』の胴を強める。『胴から』『頭から』を強める。『足が出て』を強めては良くない。『あれは胴なのだから』も胴を強める。『もつと』の方を『すばらしい』よりも強める。『おもしろいのは其の口の所』の『口の所』を強める。

ダイ ニジュウ ゴ ソオシュン

百四十九頁

カレノノ ユキワ マダ キエテ シマワナイノニ ゴラン
ソノ カレクサノ ナカニ スコシノ アオイ モノガ
ヒソカニ メグンデ イルノオ
ヒカゲノ ミゾワ マダ コオッテ イルノニ ゴラン
ヒアタリノ ミズノ オモテニ ニサンビキノ メダカガ

百五十頁

ツイツイ オヨイデ イルノオ
ハナモ サカズ トリモ ナカナイケレド ゴラン スベテノ
モノノ ウエニ ハルガ ソット シノビヨッテ イルノオ

〔甲〕

(イ) 發音 特に記すべきことなし。

(ロ) アクセント ニサンビキノ、又はニサンビキノ。

〔乙〕

此の課は全體として靜かに、餘り大きな聲でなくいふのがよい。而も沈んだ陰氣な聲でなくいふ樣に心すべきである。

百五十一頁

ダイ ニジュウ ロク シミズトンネル

サンガツト イエバ ハルワ マダ アサイガ キシャノ
マドニワ カントオヘエヤガ ウララカニ ハレテ イル
トコロドコロニ ンメガ サキ ムギノ ミドリガ
アザヤカニ ヒロガル ゾオキバヤシノ コズエガ ボット
ケムッタ ヨオニ ミエルノモ ナントナク ハルラシイ
ナガメデ アル

タカサキオ　スギル　コロカラ　トオヤマノ　スガタガ
ウツクシク　ナっタ　ミギノ　マドニ　ハルノ　ユキオ
イタダイテ　トオク　スソオ　ヒクノワ　アカギサンデ　アリ
ヒダリノ　マドニ　ツズクノワ　ハルナ　ソノタノ
ヤマヤマデ　アル

百五十二頁

マチオ　スギ　ムラオ　スギ　キシャワ　イツノマニカ
トネガワニ　ソオテ　キタエ　ススンデイタ　ヘエヤガ
ツキテ　ヤマガ　シダイニ　セマっテキタ　ミギモ　ヤマ
ヒダリモ　ヤガテ　ヤマオ　ミアゲル　ヨオニ　ナルト
トネガワモ　ガンカニ　ホソク　ナっテ　ミギニ　ヒダリニ
クっキョクスル　イクタビカ　テっキョオオ　ワタリ

ミジカイ　トンネルオ　スギタ　ソオシテ　タニワ　ダンダン
フカまっテ　イっタ

百五十三頁

ヤマワ　オクエ　ススムニ　ツレテ　タカク　ナっタ　トキニ
ヤヤ　トオク　ゼンザン　ハクセツオ　キテ　ハルノ　ヒニ
ギンイロニ　カガヤキナガラ　ソビエタツノオ　ノゾンダ
ケンザカイノ　ヤマヤマデ　アロオ　タニマニ　ソオテ
トコロドコロニ　サンソンガ　アリ　オンセンバガ　アル
ザンセツワ　ヤマノ　イタダキカラ　チュウフクニ　カケテ
マダラニ　ミエル　ナンダカ　ハルガ　ギャクモドリ　シテ
イク　ヨオナ　キガ　スル
トオキョオオ　サっテ　サンジカンヨ　コオシテ

百五十四頁

ミナカミエキニ ツイタ トキワ シュウイワ スベテ
ヤマバカリデ アッタ
コノ エキデ デンキキカンシャニ トリカエラレル
イヨイヨ ニッポンイチノ ナガイ シミズトンネルニ
サシカカルノデ アル

百五十五頁

キシャワ ウゴキダシタ ヤマオ ワケ カワオ
ツタイナガラ ノボルト ザンセツガ ダンダン フカク
ナル
トンネルニ ハイッタ コノ トンネルオ スギ ダイ ニノ
トンネルオ スギタ トコロデ マシタオ ミタ スルト
サッキ ノボッテキタ センロガ ズット シタノ ホオニ

ミエテ イマ トオル センロト ジュウモンジニ
マジワッテ イル イワユル ルウプセンデ アル

百五十六頁

キシャワ イチエキオ スギテ マモナク ダイ サン ダイ
シノ トンネルオ ツウカシタ ダイ ゴノ トンネルコソ
ナガサ クセン シチヒャク ニメエトルノ
シミズトンネルデ アル
ナカニ ハイレバ ナンノ フシギモ ナイ タダ
クラヤミノ ナカオ ゴオゴオト ハシル、バカリダ シカシ
イマ コッコクト グンマケンガ ツキ ニイガタケンガ
チカヨリツツ アル ズジョオニワ タカサ
ニセンメエトルノ シゲクラダケガ テンニ ソビエテ イル

百五十七頁

ハズダ キシャワ ヤヤ ソクドガ クワワっタ クダリニ
ナっタノデ アル モオ ニイガタケンニ ハイっタノデ
アロオ
ナオ ヤミノ トンネルガ ツズイテ イル トケエオ
ミツメテ イルト ハチフン クフン ジっプン イタズラニ
ジカンガ ナガイ ヨオナ キガ スル ヤっト
ゼンボオカラ カスカナ ヒカリガ サシコムト ミル マニ
トンネルワ ツキタ ヤク ジュウニフンデ アル
キュウニ セカイガ アカルク ナっタ ソトニワ
ハクセツニ ウズモレタ ケシキガ ヒラケタ カワ
ヒトスジ キタエ ナガレル ホカワ ヤマモ ノモ

百五十八頁

マっシロデ アル
キシャワ マタ イキオイヨク トンネルニ カケコンダ
コレモ オオキナ エンオ エガク ルウプセンデ アル
キシャワ ヒタクダリニ クダル ウシロニ ヒダリニ
ミギニ ヤマワ オソロシク タカイガ ヘエヤワ イっコク
イっコク ヒロク ナっテ イク タダ スベテノ モノワ
ユキニ ウズモレテ イル ユキワ フカサガ ニメエトルモ
アロオカ ムラノ イエイエワ ワズカニ ヤネダケオ
ミセテ イル デンチュウノ セ(エ)ノ ヒクイ コトヨ
イシウチノ エキデ フタタビ ジョオキキカンシャニ
カワル

百五十九頁

ヤマオ　コスマデ　アレホド　ウララカニ　ハレテ　イタ
ソラガ　イツノマニカ　クモっテキタ　ユキノ　ツモっタ
ヤマヤマノ　イタダキカラ　ウエノ　ソラワ　チョオド
スミデ　クマドっタ　ヨオニ　ミエル　ト　ミル　マエ
ユクテノ　ヤマガ　ボっト　シロク　カスンデキタ　タチマチ
ソオガイニ　ユキノ　フリシキルノガ　ミラレル　キタノ
クニワ　マダ　マフユデ　アっタ　フブキオ　ツイテ
キシャワ　タダ　エチゴへエヤオ　キタエ　キタエト
ススンデ　イっタ

〔甲〕

(イ) 發音　ンメ『梅』、ンはm音を表す。母音の無い音節である。ンマ『馬』の例と同じ。スソオ、スに母音無聲化を起し易いが、有聲にいふ方が良

百六十頁

い。

(ロ) アクセント　ハルナ、參考、榛名山はハルナサン。ヘエヤ、又はヘエヤ。ノゾンダ、又はノゾンダ。サつテ、又は平板式。マシタオ、又は平板式にいふ人もある。チカヨリツツ、又はチカヨリツツ。ジカン、又はジカンガ、ヒタクダリニ、又はヒタクダリニ。フカサガ、又はフカサガ。イシウチ、アクセント不確。或はイシウチともいふであらう。ススンデ　イっタ、又は續けてススンデイっタ。

〔乙〕

『第五の』(百五十六頁一行)を強める。その他全課あまり速くなく、切る所、休止の所によく注意し、大切な語句を適當に強めていへば、聽いただけで意味がよくわかるであらう。

昭和十二年一月十五日印刷
昭和十二年一月十九日發行

小學國語讀本朗讀法（卷八）【定價一圓三十錢】

著者　神保格（じんぼうかく）
東京市麹町區下六番町四十八番地

發行者　岡本正一
東京市牛込區山吹町三丁目百九十八番地

印刷者　山本禎男
東京市牛込區山吹町三丁目百九十八番地

印刷所　株式會社宗文社印刷所

發兌　圖書出版　厚生閣
東京市麹町區下六番町四十八番地
振替東京五九六〇〇番
電話九段三二一八番

☆修身教育

生活訓練と道德教育　兒童の村主事　野村芳兵衞著　四六判洋布裝入　價二・八〇　送料一四

現代修身教育指針　東京高師前調査　千葉春雄編　菊判美裝　價二・三〇　送料一四

惱みの修身　木村文助著　四六判布裝入　價二・六〇　送料一四

生活行の修身教育（學年別全六册）　齋藤榮治著　菊判美裝入　各二・八〇　各送料一四

勞働創造の修身教育　河野通賴著　菊判洋布裝入　價二・五〇　送料一四

生活內省と修身教育　河野通賴著　四六判洋布裝入　價二・五〇　送料一八

全人格的生活と修身教授の諸相　河野通賴著　菊判洋布裝入　價二・五〇　送料一八

修身教育問答　東京高師調査　川島次郎著　四六判布裝入　價二・〇〇　送料一四

教材津梁（此問題は會員の基準とす）尋一修身指導書　兒童の村主事　野村芳兵衞著　菊判洋布裝入　價三・四〇　送料一八

人格主義の倫理と修身　野村芳兵衞　河野通賴共著　四六判洋布裝入　價二・〇〇　送料一四

最近思潮修身教育實踐の進步　河野通賴著　四六判洋布裝入　價二・〇〇　送料一四

修身・國史・國語辨證的教育の實踐　厚生閣編輯部編　菊判洋布裝入　價二・五〇　送料一四

松本光亮著　菊判洋布裝入　價二・九〇　送料一四

☆國語教育

國語教育學　東京高師講師　丸山林平著　菊判背革裝入　價四・二〇　送料二二

辨證法的國語學習　齋藤榮治著　四六判洋布裝入　價二・三〇　送料一四

國語科要旨の批判と解說　東京高師前調査　宮川榮芳著　四六判洋布裝入　價一・八〇　送料一四

國語教育診斷　武藤要著　四六判洋布裝入　價二・八〇　送料一八

國語の本質とその教育　廣島高師調査　佐藤德市著　四六判布裝入　價二・六〇　送料一八

國語教材內觀の方法　齋藤榮治著　四六判洋布裝入　價二・六〇　送料一四

小學國語讀本の指導とその理論　東京高師前調査　千葉春雄編　菊判美裝　價〇・六〇　送料一四

小學國語讀本の指導とその理論（前期用）　東京高師前調査　千葉春雄編　菊判美裝　價〇・八〇　送料一四

國語教育の修身的考察　河野通賴著　四六判布裝入　價二・五〇　送料一四

最近の文學・文章研究と國語教育　東京高師前調査　千葉春雄編　菊判洋布裝入　價二・五〇　送料一八

最近の心理學と國語教育の問題　東京高師前調査　千葉春雄編　菊判洋布裝入　價二・七〇　送料一八

國語教育の科學的研究　東京高師前調査　千葉春雄編　菊判洋布裝入　價二・五〇　送料一八

國語教育の方法學的研究　東京高師研究調査　千葉春雄編　菊判洋布裝入　價二・五〇　送料一八

日本精神の發揚と國語教育　東京高師前調査　千葉春雄編　菊判布裝　四六判布裝　價二・五〇　送料一・八

國語教育中心　兒童讀物の系統的研究　東京高師前調査　千葉春雄編　四六判布裝　價一・八〇　送料一・四

國語讀本を戲曲化せる　兒童劇脚本　東京高師前調査　宮川菊芳　三浦成作共著　四六判美裝　價三・〇〇　送料一・四

高等讀本を戲曲化せる　兒童劇脚本　東京高師前調査　宮川菊芳　三浦成作共著　四六判美裝　價二・五〇　送料一・四

新讀本を戲曲化せる等一の　兒童劇　三浦成作著　四六判美裝　價一・五〇　送料一・四

新讀本を戲曲化せる等二の　兒童劇　三浦成作著　四六判美裝　價一・五〇　送料一・四

聯關法的解明　讀方教育の新機構　廣島高師調査　佐藤德市著　菊判洋布裝　價二・六〇　送料一・八

形象の讀み方教育　廣島高師調査　佐藤德市著　菊判洋布裝　價二・九〇　送料一・八

辨證法的讀方教育　森本安市著　四六判洋布裝　價一・八〇　送料一・四

生命の讀方教育　廣島高師調査　佐藤德市著　菊判布裝　價三・四〇　送料一・八

辨證的日本精神への讀方教育　吉田義則著　四六判洋布裝　價一・八〇　送料一・四

態度馴致の讀方教育　東京高師前調査　宮川菊芳著　四六判布裝　價二・六〇　送料一・四

讀み方教育要說　東京高師前調査　千葉春雄著　菊判洋布裝　價四・八〇　送料一・八

讀方教育の鑑賞　東京高師前調査　宮川菊芳著　四六判美裝　價二・〇〇　送料一・四

讀方教育問答　東京高師前調査　宮川菊芳著　四六判布裝　價二・〇〇　送料一・四

實踐解明の讀み方教育　東京女高師調査　德田進著　菊判洋布裝　價四・五〇　送料一・二二

組織的實踐の讀み方教育　谷口徹美著　菊判洋布裝　價二・三〇　送料一・四

實力養成の讀方指導　東京高師前調査　千葉春雄編　四六判布裝　價一・八〇　送料一・四

讀方科各學年指導主眼點の研究　東京高師前調査　千葉春雄編　四六判布裝　價一・八〇　送料一・四

讀方科教材研究の仕方　東京高師前調査　千葉春雄編　四六判布裝　價一・八〇　送料一・四

讀方科に於ける書取の研究　東京高師前調査　千葉春雄編　四六判布裝　價一・八〇　送料一・四

讀方科學習帳使用に關する研究　東京高師前調査　千葉春雄編　四六判布裝　價一・八〇　送料一・四

讀方科に於ける板書の研究　東京高師前調査　千葉春雄編　四六判布裝　價一・八〇　送料一・四

各學年系統的　讀方科考査の研究　東京高師前調査　千葉春雄編　四六判布裝　價一・八〇　送料一・四

卷近思關　讀方教育實踐の進步　厚生閣編輯部編　菊判洋布裝　價二・五〇　送料一・四

讀本朗讀の實踐的研究　東京高師前調査　千葉春雄編　四六判布裝　價一・八〇　送料一・四

國語學習書　アクセント辭典　東京文理大教授　神保格　常深千里共著　三六判雜革裝　價二・五〇　送料一・四

小學國語讀本朗讀法（巻一前期用）　東京文理大教授　神保格著　菊判　價〇・八〇　送料一・〇

小學國語讀本朗讀法（尋一後期用）東京文理大教授 神保格著 菊判 價〇・九〇 送料一・一〇

小學國語讀本朗讀法（尋二前期用）東京文理大教授 神保格著 菊判 價一・一〇 送料一・一〇

小學國語讀本朗讀法（尋二後期用）東京文理大教授 神保格著 菊判 價一・一〇 送料一・一〇

小學國語讀本朗讀法（尋三前期用）東京文理大教授 神保格著 菊判 價一・一〇 送料一・一〇

☆綴方教育

綴り方指導系統案一覽表 東京高師前調査 千葉春雄著 四六判布装 價〇・一五 送料〇・〇二

調べた綴り方とその實踐 上田庄三郎著 四六判布装 價二・二〇 送料一・一四

教室用綴り方 富原義德著 四六判布装 價二・九〇 送料一・一四

村の綴方 木村文助著 四六判布装 價二・三〇 送料一・一四

土の綴方 富原義德著 四六判布装 價二・六〇 送料一・一四

新文話と綴り方教育 佐々井秀緒著 四六判布装 價二・六〇 送料一・一八

綴り方のおけいこ（全六册 尋一―尋六） 東京高師前調査 千葉春雄編 菊判 各〇・四〇 送料各〇・八

綴り方教科の施設と經營 東京高師前調査 千葉春雄編 菊判洋布装 價一・九〇 送料一・一四

最近の文學と綴り方教育 志垣寛著 四六判美装 價一・八〇 送料一・一四